
魔法先生ネギま！～顔なき英雄～

× ×

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜顔なき英雄〜

【Nコード】

N8589L

【作者名】

××

【あらすじ】

目が覚めると目の前に奥行きがない胸を持った金髪碧眼幼女が爆笑してた。

お前とりあえず違う世界行ってこいってお前まじぶっ飛ばす。

よくあるお話です。魔法先生ネギま！と仮面ライダーの化学融合を

お楽しみにw w w

グチャグチャになったので書き直し予定
現時点での感想は出来ません

プロローグ（前書き）

二作目です。優先順位は決めてないんで、ネタが浮かんだ順に書いていきます。

とりあえず楽しんでください。

誤字脱字は報告お願いします

ブローグ

目を覚ますとそこは……何にもなかった。真っ白い部屋空
間、精神疾患の人が入る隔離施設が浮かんだね！

あるとかいるとしたら金髪碧眼の少女だけ……しかもこっち
を指差し見て爆笑してる。

……うぜえ

まあこういう手合いは無視するに限る……寝よう

寝ようとして目を閉じると

「ギャハハハッ……ブッハアハハハ……ヒイヒイ……アヒヤ
ヒヤヒヤ」

笑い声が大きすぎて眠れない正直うざすぎる

「おいそこの壁面爆笑少女」

「ヒイヒイ……何？」

「なんで爆笑してるわけ？」

「いや……あんたの死に方が面白くて……ブッハアハハハ……」

「
What？」

俺の死に方？

H a h a h a 待つてよセニヨリータ

「ちよい待て壁面幼女。俺は生きているんだが？」「馬鹿ね。ここはあの世とこの世の堺よ」

「はあ？」

「にしても・・・自殺しに学校の屋上に行つて、そこにいた自殺しようとするやつを助けて、そのまま足を滑らせて死ぬとか爆笑ものね」

「・・・・・・・・ああ」

思い出した・・・あまりにも人生つまないから死のうとしたら、先客がいてそれが初恋の人だったからつい説得して助けたら・・・滑つて落ちたんだ俺

なんという最悪な死に方orz

「見る？あんたの挽き肉ハンバーグ」
「結構です」

トラウマになるわボケ

「そついいかんじにグチャグチャよww」

教育委員会に訴えるぞこのアマ

「であんたは誰ですかねえ？」

「我は神よ！！　であり　であり　でもなく　でもないものよ！！」

ああ・・・

「病院行こうか？」

「本当じゃボケ！ミートボールにして食うぞっ！！」

カニバリズムかよ

放送倫理委員会に訴えるぞ

「神だから問題なし！！」

地の文読むなよ

「神だから問題なし！！」

テラうぜえこの二次元駄神

「ほう我には奥行きはないと？そっいう意味か？」

「スリムボディってことですかね」

「なめんなっ!!」
「ぐふえ」

飛び蹴りを喰らった・・・内臓に響く
辛いからorzみたいなポーズをとって休んでいると上に乗られた。
うぜえ

「で神様（笑）が何のようなんですかね？」

「この作者の主人公って基本我に無礼だよね？」

「メタ発言はやめてください・・・お前は挽き肉大好きすぎる」

「大きなお世話じゃ」

「でなに？」

「暇だからなんか願い事一つ叶えてやろう」

ま〜じ〜で〜

「お前さん我を馬鹿にしてるじゃろ」

「まさかとんでもない神（笑）を侮辱するなんて」

馬鹿にはしてると

特に胸を

「馬鹿にはしてると？特に胸を？」

「地の文読むなって」

「モウマントイじゃ」

「中国語で言うな」

「面倒だから早く願い事を言うのじゃ」

「だったら神にして」

「無理」

「………神を殺させて」

「無理」

「んだよなんも聞いてくれないじゃんっ！！」

「お前さん我に喧嘩売りすぎじゃから！！馬鹿にしすぎだから！！」

というか特に願い事とかないし………

「なら違う世界に飛ばしてやるわ……次は漫画にしよう」

「おい待てや二次元駄神」

「なんじゃ？………ネギま！とかでいいか」

「だから俺は何も望まないって！！何もしたくないって！！ってか何ボソボソ言ってるの！？ネギまとか俺三巻までしか持たないからっ！！三巻以降のバトルパートで普通に死ぬからっ！！脇役A Bとか村人A Bとかがいいとこだから！！」

「大丈夫大丈夫ちゃんと考えてるから……はいこれ」

そう言つて二次元駄神は、俺に何かを手渡してきた。
それは……………

「これってデイケイドライバーとライドブッカーじゃねえか!」
「さすが引きこもりオタク」

うるせえよ!!

二次元駄神が渡してきたのは仮面ライダーデイケイドの変身グッズ
だった。

しかもカードを見るとフルライダーをコンプリートしてた……………
・最悪すぎる

こんなの持つてたら……………

「ああちなみにお前さん以外に使えないし、手元から三日以上離れ
てたらお前死ぬから」
「駄神コロスっ!」

俺は二次元駄神に殴りかかった。すると駄神はそれをかわして、僕

の股間にフットスタンプをしゃがりました。ブッコロ・・・

俺が再びorzみたいな格好をしていると、
今度は俺の上に立ち何故かジャンプした。

・・・まさか

「さっさといってこいやっ!!」

勢いをつけて俺に再びフットスタンプをしてきたしかも両足

そして何故かは下は地面じゃなく真っ暗な空間で

そうして俺は正しく重力に従い落ちていった。

「くそ駄神いつかコロスっ!!」

俺はこの言葉を最後に世界を移動した。

故に駄神の最後の呟きなど聞こえるわけもなく

「不幸な奴は救われるべきなのじゃ」

駄神の優しい笑顔など知りもしなかった

《
続
》

プロローグ（後書き）

楽しんでいただけたなら幸いです・・・まあまだ変身すらしてないんで無理でしょうねwww

次回はエヴァと出会います。

いやぁなんでもありだなあゝ

1話：へい子猫ちゃん（前書き）

1話です。

アタックライドの設定が自己解釈というか・・・事故解釈なので気にしないで進んでください。

やめてそんな目でみないで・・・・・・・・興奮するだろ？

冗談です。作者はドSです。

誤字脱字は報告お願いします？

1話：へい子猫ちゃん

目が覚めると………空中でした。

笑えない！！笑えないーっ！！

いきなり過ぎる事態に多少涙目になりながらも必死に空中でディケイドライバーを腰に当て、ライドブッカードからディケイドのカードを取り出し、ディケイドライバーに挿入する。

「変身っ！！」

仮面ライダーになるには何故か言わなくちゃいけない気がしたのでつい出てしまった……

『カメンライド……ディケイド！！』

ディケイドライバーから発せられた声共に赤と黒のシマシマがメイソカラーのどこか四角ばったデザインの仮面ライダーディケイドとなり、そのまま俺は下を見ず着地する。

凄まじい轟音と地面から舞い上がった土砂を感じながら立ち上がる……そこには暗い闇夜に明かりを携え呆然とした顔で武器を構える男たちと男たちに囲まれ武器を向けられたボロボロ金髪の少女がいた。

あれ？変なフラグ立ってないか？

原作に関わらずに平凡な生活を送ろうとしていたのに……
何かしらのフラグが経っているような気が……

「ひい化け物だ！殺されちまうぞ！逃げろっ！！」

呆然としていた男たちは俺の姿を正しく確認するとそういつて男たちは武器を放り出して全力疾走で逃げていく

失礼な！このプリティーフェイスのどこが化け物だと……
んまあ微塵もプリティーなんて思ってたねえけど

まあうんよかった何も起きてない。フラグはへし折られたようだ・
・そう思い安堵しながら変身を解こうとディケイドライバーに手をかけると、金髪の少女がいまだにこちらを見ていた……というかガン見

「貴様何者だっ！！」

見つめ返すと目を険しくして何故かめっちゃ怒鳴ってきた。冤罪だよ、冤罪。何にもしてねえじゃん俺！ただ空から降ってきただけじゃねえか！

・・・ああ正しく変人だね。説明面倒だなあ

なら

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

とりあえずごまかすことにした！人生曖昧模糊が素敵なんだよ！ミステリアスな男の方がカッコイイだろ？

そういつて逃げるためにもその場を去ろうとすると、少女は僕の前に立ち塞がり

「何の用だ？」

喋る時は口調を変えよう・・・だってこの少女・・・絶対エヴァちゃんだし。あとあと絡まれるの絶対嫌だし

あゝあよく考えたらさっきの男たちの格好から見てここは現代じゃないよあゝ

どうみても麻帆良でもないみたいだし・・・何やってんのあの二次元駄神。何がやりたいのかわかんねえ

正しく腹立つわゝ

「貴様聞いているのか!？」

「悪い聞いてなかった」

考え事している間にエヴァちゃんが何か言ってたらしい・・・んま
あ全然聞いてないから素直に答えてみる。

キヤツ素直な俺に惚れるなよ？んまあ激しく冗談だけど

内心軽口を叩きながらぼうとしているとエヴァちゃんは真っ赤な顔
をして、怒鳴り始める。

「だから、なんで私を助けたのかと聞いているんだっ！？」

ツンデレ乙

素直にお礼の言えないエヴァちゃん乙

そういえばなんかエヴァちゃんって二次元駄神に似てない？
特に外見が・・・軽く殺意わいたわ

「聞いているのかっ！？」

軽く殺意をわかせているとまた怒鳴られたので、アメリカ人のよう
にオーバーリアクションでヤレヤレ的なポーズをとりながら

「だから通りすがりだと言っただろうが」

「そんなわけあるかっ！！空から降ってきた奴が通りすがりなわけ

なかう！」「
うるさいなあ」

「空から突き落とされたんだよ．．．まじ死ぬかと思ったんだからなっ？正しく通りすがりだろ？」

何故かキレ続けるエヴァちゃんに明確な理由を述べながらその状況を思い出すと軽くいらつてくる。

本
当
に
な

超ム力つくぜ

あの胸と一緒にできつ
と思いやりとかも1ミク
ロンとかしかないだろ
うなあゝ

ああ……胸は1ミクロンもないか

駄神を罵倒すべくそう思っていると上空から四角型の何かかが降ってきて、無論くだらないことを考えていた俺によけるすべはなく俺の脳天に直撃した。

「メギヤアアアアアアアアアアアアアアアア——っ!？」

正しく激痛だった。
テラ痛いッス

めがつさ痛いッス

頭上から降ってきた四角型を拾いあげるとそれはカード束でその先頭には何か書いてある紙がゴムの間に挟まっている。
ゴムの間から紙をとり中を眺めると

『誰がつ!! コンクリートブロックだつ!!?』
と書かれていた。

言ってねえよ・・・あつライダー以外のカードだ
いやぁアタックライドとかなくて困ってたんだよね
そこらへんは正しく感謝しといてやろう

というかカードをゴムで纏めるなよ!
うちのオカンか!?

カードが傷つくだろうが・・・全く
全国のオカンはカードの大事さを理解出来てないんだよ!!
遊○王とかゴムで纏められたときとか超萎えるぜ!

「なんだそれはっ!?!」

エヴァちゃんは空から降ってきた物体Xが気になるらしく、俺の手元を見ようと背伸びやらジャンプをしていた・・・可愛いなおい

確かに僕の身長176cmと割りと高めだけど・・・ジャンプとか・

「撫でるな!」

おつと知らない間にナデナデしてしまっていたようだ、いけない手だ。

「すまない許可もとらずに・・・撫でていいか？」

「いいわけあるかーっ!!」

エヴァちゃんは僕の発言に憤慨したらしく、また怒鳴ってきた。カルシウムが足りてないな、だから身長も伸びないんだよ・・・本当は関係ないらしいけど

ああそれにしても和むなこの感じ・・・前の世界じゃ考えられないな

むしろ俺がエヴァちゃんに会えてテンションが上がっているのかもしれないな。たぶん猫力フエとかより癒される。行ったことないけどね

「全く調子の狂う奴だ・・・でさっきから手に持っているカードはなんだ？」

キヤあそんなにガン見しなくても・・・恥ずかしいじゃないか

「ええと・・・魔法のカードだ」

説明するのも面倒なのでごまかしてみた。

「馬鹿にしてるのかーっ!!」

OHお怒りに

エヴァちゃんは僕の両肩を掴みガクガクと揺らしてくる。ちよつ止めて首とれる。首なしライダーとか違う作品だから・・・

エヴァちゃんは満足したのか、疲れたのかは知らないが一旦暴れるのをやめて息を荒げて再度尋ねてきた。

「で・・・何なのだ、それは？」

「武器や使い魔を召喚するためのカードだ」

説明するのが面倒なので大雑把に言えばだけど・・・

「例えば？」

「ええと口では説明しづらいな・・・なら」

疑心暗鬼なのか完全に疑ったような眼差しを向けてくるのでしょうがなく僕はカード束から一枚のカードを出して、デイケイドライダーに挿入する。

『アタックライド・・・キャッスルドラン！』

デイケイドライダーから流れるお馴染みの音楽と共にキャッスルドランがどこからともなく現れた。本当にどこから来たんだよ・・・

「なっ！？」

エヴァちゃんは驚きの声を上げた後口を半開きにして固まったまま動かなかった。まったく信用してなかったのか・・・

とりあえずリアクションが欲しいので撫でてみた・・・・・・・・ふむ
無反応か

ならばとエヴァちゃんの両脇に手を差し入れて高い高いしてみた・
・・・・「ふんっ！」・・・顔にフットスタンプを喰らいました・
・まじで二次元駄神の親戚だろ。

「で何なのだあれは？」

質問ばつかなあ。マスクの中で面倒くさそうな顔をしながらも質問に答えていく

「あれは城の形をしたドラゴン、通称キャッスルドランだ。ちなみに隠蔽機能つきの素敵な子だ」

・・・というか今気づいたんだが・・・どうして俺とエヴァちゃんは会話出来ているんだ？ここ日本ではないからエヴァちゃんが日本語知っているとは思えんし。アレかギャグ故の絶対的ご都合主義か。無理矢理納得させておいた

たぶん二次元駄神のおまけとか？

自動翻訳蒟蒻みたいなの？

初めて神（笑）を讃えたくなったよ。

「それはすごいなっ！」

エヴァちゃんは興味津々みたいです・・・なら

「貸してあげようか？」

「はっ？」

エヴァちゃんは何言っただコイツ的な目で見てきたが・・・そんなこと気にしない。気にしてたら前の世界では生きていけないから・・・あつだから死んだのか

やはり少しは気にしておく・・・辛いです。イジメ、ダメ、ゼツタイ

「だから貸してあげるよ」

「何を言っているんだ貴様は、初めて会った奴からあんなもの借りれるわけがなからう」

「だって君襲われてたでしょ？村から追い出されたんでしょ？なら住む場所が必要じゃないか？」

「ぐっ・・・私は吸血鬼だぞ！真租の吸血鬼で化け物なんだぞっ！だから追い出されたんだぞ！そんな私に・・・」

俺は面倒になったのでエヴァちゃんの頭を撫でながら優しく諭すように子供に言い聞かせるように言う

「外見で化け物なのかと問われれば、君は化け物じゃない。内面で化け物なのかと問われれば、君は化け物じゃない・・・俺にはそう思えない」

「なっ！？私は化け物で・・・」

「正直に言えば、そんなことはどうでもいい。人か人じゃないかなんて些細な問題だよ。俺は君にこのキャッスルドランを貸したいから貸すだけだ」

そついうとエヴァちゃんは俯き黙り込んだ。

こんな可愛い娘が化け物ならさっきのムサイ男たちはゴキブリ以下じゃねえか。

全く・・・笑えない世の中だ。こついうところはどこの世界も変わらないな。

「わかった・・・借りてやるよ」

エヴァちゃんは顔をあげ少し赤くなった顔を逸らしつつ俺にそう言うてきた。

「わかった・・・ならこのカードを預けておく。動かしたい時はドラに直接頼むといい」

俺はエヴァちゃんにキャッスルドランのカードを渡した。

エヴァちゃんは不思議そうな顔をして尋ねてきた。

「このカードを使えば、自由に動かせるんじゃないのか？」

「そのカードを使えるのは俺だけだ」

「そうかわかった・・・恩に着るぞ」

「ああ今度会ったときにカードを返してくれればいいぞ」

そう言いながらエヴァちゃんの頭を撫でると今度は何も言われなかった。

「・・・お前の名前は？」

うーんここで本名はまずいなあ

「ディケイドだ」

「そうか・・・私の名前は、エウヰア・アンジェリン・A・K・マクダウェルだ」

「了解だ子猫ちゃん^{キティ}」

「なっ貴様何故その名を知っている!？」

「H a h a h a なんのことかな」

俺はその場から逃げつつ、カード束からカードを出しディケイドライバーに挿入した。

エヴァちゃんがガチで追ってきているが・・・そんなの無視だ。あの目は殺す目だった・・・からかいすぎた。

『アタックライド・・・デンライナー!』

俺はどこからか現れたデンライナーに飛び乗りエヴァちゃんに手を振った。

「いつかまた未来で会おう! 会えたらな!」

エヴァちゃんはデンライナーを見て、再び呆然としていた。お口は閉じようね、アホの子に見えるから

まあ可愛いからいいや

そのまま俺はデンライナーを動かし、ネギがいなくてであろう未来へと向かう。原作に絡みたくなければ主人公のいない時代に行けばいいんだよ

パスなしで動いたのは不思議だが、それかきつと神の力（ご都合主義）にちがいない

さあて未来人と絡みに行くかな

そうして後ろ向きな俺が初めて微妙に前を見ることを始めた。

こんな人生なら生きていても悪くはない。無論原作に関わらなければ

《続く》

1話：へい子猫ちゃん（後書き）

どうでしたか？エヴァちゃんとの絡みは？

エヴァちゃんのからかいやすさは天下一品ですよね

まじでたまりません

次は紅き翼と出会います。

楽しんでいただけたようなら幸いです。

2話：紅き翼との邂逅といつか喧嘩（前書き）

どうも××です

感想ありがとうございます？

ご意見と訂正も頂きありがとうございます

誤字脱字は報告お願いします

2話：紅き翼との邂逅というか喧嘩

エヴァちゃんを弄繰り回し新たなる未来に向かうべくデンライナーに飛び乗った俺はお約束の客室へと向かう。

扉をあけて中へと入りとりあえず感動した。テレビであんだけ騒いでるのを見て思ったのだからなかなか広いな。ここに住んでもいいくらいだ・・・おっ

何故かテーブルの上に旗が立っている炒飯とスプーンが置いてあった・・・これはやるしかないか

ふとそう思い俺はスプーンを構えて、旗が倒れないように炒飯を食べていく。やっている途中で横から皿とスプーンがぶつかる音が聞こえた。気になったのでそちらに目を向けると二次元駄神が俺と同じことをやっていたので・・・ム力ついたからスプーンで駄神の炒飯をえぐった。

旗が倒れたのを見て、駄神はムンクの叫びのように顔を手で押さえハッとした表情をしてから俺の顔を睨んできた。

そして俺の旗を普通にスプーンで倒してきた・・・潰す。

俺と駄神はともに睨み合い、相手を抹殺するべく手始めに互いのスプーンを額に向けて投げた。

「くたばれっ！」

向かってきたスプーンをお互いにかわし、俺はその隙をつき駄神に

殴り掛かる。

「喰らえ、くそ駄神っ！・・・なっ！？」

駄神は俺の渾身の右ストレートをスウエーでかわし、俺のお腹にフットスタンプをかましてきた・・・しかしこっちもこれでフットスタンプを喰らうのは三回目タイミングなど読んでいる。俺は駄神のフットスタンプを片手で掴み、防ぐ

「ふっ・・・甘いな！」

「なんだと！？」

しかし駄神は俺が掴んでいた足を軸に俺の後頭部に刈るような蹴りをかましてきた。

ドンッ

さすがに読み切れずに無様にも後頭部に蹴りが直撃し、ダメージに耐えられなかった・・・せめてもの抵抗をみせようと俺は駄神に向かって中指を立てる。

駄神は笑いながら俺を引きずり、外に放り出した。

そして俺は意識を失った・・・いつか必ずあのえぐれ胸駄神を潰す。

俺は夢を見ていた。

それは元の世界の話で、下の妹三人と仲良く話し、両親とも笑って会話をしていた……。ああ夢だな。あんなに楽しそうに会話をしている時点で間違いなく夢だと理解できる。

現実では俺の父親は死亡

母親は水商売

三人姉妹は俺を敵視していた……。理由は覚えていないが、父親の死に様子が哀れだと言ってからそうなった気がした。

高校に行って何の目標もなくダラダラ過ごした……。何もせずに・

高校3年生になって何をしたいかが分からなくなった。意味もなく先もなしに生きて何が楽しいのか理解出来なかった……。父親みたいに笑って誰かを助けて死ぬなんて信じられなかった。

だから自分が人を助けて死んだとき笑えたんだ。

ああ俺も父親と一緒に大人よしなんだって理解して……。笑えた

自分が嫌ってた親父の死に方と一緒にかよ

何もする気が起きなかった……。でもこの世界にきてほんの少しだけワクワクしてる自分がいた。

エヴァちゃんにあつて、デイケイドに変身して、キャッスルドランを呼んで……。ああ人生ってこんなに楽しかったっけって思った・
・考えた。

それでも俺は・・・普通が、平凡が好きだった（きらいだった）。夢から目が覚めると、そこは戦場だった・・・亜人と人間が入り乱れ、魔法をぶつ放しお互いに殺し合っている。

これは大戦か

俺は寝ぼけ頭でそう思い浴びないので少し離れた場所に移動して様子を見ていた・・・すると赤い髪の馬鹿が

『千の雷っ！！』

でかい魔法を発動させてきた・・・ちよっ俺も範囲内かよ！？俺は急いでディケイドライバーを装着し、変身する。

「変身っ！」

『カメンライド・・・ディケイド！』

俺はディケイドとなり、急に魔法をぶつ放してきた馬鹿を見つめ誰かを把握する。それは、『千の呪文の男』と言われるナギ・スプリングフィールド・・・英雄と呼ばれるであろう男だった。

よしっ！とかガッツポーズ取っているのが凄い腹立たしい・・・一発殴るか

そう思いナギの前に立ち、喧嘩を売る。これまでのストレスを全部あいつに向けよう。なんか忘れていたような気がするけど、腹立たしいから忘れたな

「その赤髪の馬鹿そうな男!!」

「なんだと!? 誰だお前っ!?」

「黙れ! とりあえず殴らせ・・・」

俺の台詞は途中で止められた・・・どっかの筋肉馬鹿ラカンが俺に向かって戦艦並の大きさの剣を投げてきたためである。K I L L

「あっ・・・」

「なんだ知り合いか?」

「いや喧嘩売られたから・・・買おうとしたらお前が」
「なら問題ないな」

赤髪馬鹿と筋肉馬鹿の会話が腹立たしい・・・周りのメンバーも笑っていやがる。

「お仕置きが必要だな」

「・・・・・・なっ!?」

俺が立っていたことに驚愕を隠せない紅き翼たち。俺はそれを見据えつつライドブッカードからカードを出し、ディケイドライバーに挿入した。

『カメンライド・・・クウガ!』

ディケイドライバーから発せられた声の後に俺はクウガとなり、再びライドブッカードからカードを一枚だして、さらにディケイドライバーに挿入する。

『フォームライド・・・アルティメット!』

クウガの最終形態であるアルティメットフォームへと移行した。その姿は刺々しい黒い鎧に覆われていてまがましい力を放っている。ライジングアルティメットでもよかったが、今は気分的にこっちだ。怒りのままに暴れてやる！

俺はとりあえず筋肉馬鹿へと近づき思いっきりぶん殴り吹き飛ばした。

「もぷっ」

筋肉馬鹿は吹き飛び、星になった・・・次は・・・

「かかってこいや赤髪馬鹿っ！」

「面白い！やってやるぜ黒刺々っ！」

俺たちは何の防御も何の技も何の考えなしに殴りあい続け・・・途中で筋肉馬鹿が復帰してきたので、筋肉馬鹿を赤髪馬鹿に向かって投げ、二人を喧嘩させつつ、三人で殴りあいが始まった。

他の紅き翼のメンバーはいきなり始まった喧嘩とバグキャラとチートキャラと殴り合いをする俺に驚いていたが、まあ馬鹿だからいいや的な顔をしてその場で飯の支度を始めている。三時間以上殴り合い・・・最後はナギは俺に、俺はラカンに、ラカンはナギに、互いにとどめをさしトリプルノックアウトとなった。へっざまあ

俺はダメージによる変身が解けて、誰かに背負われているところで

気を完全に失った。

目が覚めると、アルビレオが俺の顔を覗き込んでいる・・・近い、微笑むなキシヨイ

見渡すと横に寝かされていたナギとラカンも起きたらしく、こちらを見て、微妙な表情していた・・・喧嘩売ってんのか

「お前さっきの黒い刺々の奴か？」

確かに刺々かったが・・・もうちょい言い方を考えろよ、だから馬鹿なんだよ。ナギが若干馬鹿ばっぴい感じで話し掛けてきたので若干いらつとしたが、こちらとしては殴って気がすんだので、普通に答えることにした。

「ああそうだ」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。お前強いなっ！俺達の仲間にならないか？」

あるえ？

どこでこんなフラグを？

まあこいつらについていけば下手なところよりは安全か

「ああいいぜ。ただし戦闘はしないからな！！」

軽くニート発言をして俺は紅き翼の一員となり互いに自己紹介をしあい色々と聞かせてもらった。もちろんニート発言に文句を言う馬鹿がいたがそんなのは無視。一応仲間になるのでディケイドではなく本名である林原 孝明と名乗った・・・2話にして主人公の名前が出るとか笑えなかった。

筋肉馬鹿はジャック・ラカン

巫女さんが好きそうな顔をしたのが青山 詠春

変態そうなのがアルビレオ・イマ

ジジイ口調のちびっこがフィリウス・ゼクト

ああなんか選択まちがえたばい

《続く》

2話：紅き翼との邂逅という喧嘩（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

クウガのアルティメットは正直迷いました。

正気を保てないはず・・・と思った方。
すいません勘弁してください？

アギトのシャイニングでもよかったんですが、ここはクウガかなって思いました

ちなみに来週はコンプリートフォームが出る予定です

どうやってケータッチを手に入れるかは・・・まだ考えてません
orz

次回もお楽しみに？

3話・はしよりすぎでしょ（前書き）

正直やっちゃった感があるぜ！

というか把握しきれてないから書くのが嫌だったというのが一番大きいです

誤字脱字は報告お願いします

3話：はしよりすぎでしょ

自己紹介を終え、俺は料理人として活躍しようとしていたが本格的に帝国と連合の戦争に参加させられて、巨大要塞グレートブリッジ奪還作戦で紅き翼と共に連合で名を上げさせられた。さすが仮面ライダー、泣いてしまうほど最強です！畜生！！ちなみにデンライナーのカードは空白になって使えませんでしたorz逃げたかったな。明日はいつだってブランク！！な気分ですオーズの的な意味で

そうして俺に着いたあだ名が『顔なき英雄』『無貌』『冥府への入り口』『凄まじき戦士』『時を置き去りにする白銀』『破壊者』『ちよっあいつのパンチおかしくね！？』『出たよ、あいつの分身全部が本体とかまじ異常』とかだった。

なんかカメンライドしまくって敵を倒して色んな顔になりすぎたせいのようにいっぱい変なあだ名がついた・・・正直微妙な気持ちになる。

クウガ、カブト、ディケイド、アギトバーニングフォーム、オーズガタキリバコンボのせいですね、分かります。

冥府への入り口は紅い翼が戦う時に俺が一番後ろにいてあいつらが取りこぼした敵をぶちゅっとしまくってるから。これ以上後ろはないの的な意味だろう。

無貌とかは名前もディケイドって言いっづけたからね・・・本名と素顔は決して晒さないように

でもさ・・・なんか最初のあだ名とかラカンのアーティフェクトに似てるじゃん・・・千の顔をもつ英雄とか、俺の真逆に位置するしそんなくだらないことで文句を言いつつ落ち込みながらも日々を過ごしていた。

アルと詠春と一緒にコスチューム会談をしたり

『馬鹿ですね。ロリには何を装備しても最強なんですよ』

『いや巫女さんの攻撃力のとかさに比べればロリなんて』

『ハッナースがいいに決まっている。あの包容力の高さが理解出来ないなんて』

ゼクトとチェスや将棋で勝負したり（ちなみに全敗したorz）

『ぬう』

『これで1255戦全勝かの？』

『まだまだ！！』

『・・・・・・おい。右手で駒を置きながら左手で駒の配置をスラスのをやめんか』

『・・・・・・キノセイジャネ』

『負けそうだから盤をひっくり返そうとするんじゃない！！』

ナギとラカンと殴り合ったりして日々を正しく・・・訂正ろくでもない日々だった。いつかナギとラカンを潰す！

途中でタカミチとガトウ・カグラ・ヴォンデンバーグとクルト・ゲーデルが紅き翼に参加し、更に戦力を増やしてますますあげたくも

ない名を上げていく

ある日記念に写真をとることにしたのだが・・・無駄なフラグを立てたくはなかったので素顔で写るのを拒否して変身しようとしたら馬鹿筋肉ダルマに取り押さえられ素顔のまま取ら普通に写真が配分された。

そんな日々を過ごしつつ、不様にも完全なる世界に嵌められ連合から指名手配されひそひそと安穩な逃亡生活を続け（一生この生活を続けたかったね！）、テオドラとアリカ姫を助けて、隠れ家に招待した・・・なんでテオドラに姫をつける気が起きないんだろう？

ちなみに俺は子供たちに大人気で俺が主役のアニメがやっていたりもした・・・まんま仮面ライダーのはご愛敬ってやつだ。仮面ライダーは正義の味方だからな、子供に人気がでるのはしょうがないことだ。まあ儲けはもらったけど、当たり前だ。印税みたいなものがある。これで余生を過ごすために！！

もちろん隠れ家にきた際に淑女を気取る小さな子供のテオドラも『顔なき英雄』の素顔を見ようと頑張っていたが、俺だとは気づいてなかった・・・割りと陰で笑っていたのは内緒である。どうやら小間使いだと思っていたと聞いたときは軽く絶望したが・・・まあ思い返せば、それだけ目立たないということは平和な日々を過ごせると言うことであろう。

残念なことにアリカ姫は気づいてたっぽい・・・陰でサイン書かされたし

多分アスナちゃんのために持っていくんだろう・・・そういう風に

納得した・・・というかさせられた。ビンタ怖い。王族の魔力怖い。そしてタカミチがガトウから、クルトが詠春から戦い方を習っている間、俺も二人を見ながら戦い方を学んでいた。

何故かという残念なことに安穩な日々を送りたいものの生き残るためには戦うしかなく、今の俺は仮面ライダーの力に頼りきりで変身することで力を得ているだけで、戦闘に関しての技術は素人だったからである。力だけで立ち向かうのには限界があるからな。

ラカンに笑われながらもめっちゃがんばり、なんとか変身せずとも戦えるようになった。

いくら素人とは言え仮面ライダーを名乗り、英雄になったものがさすがにタカミチやクルトに負けるのはいただけない

変身しないとフルボッコにされたがorz

まあ今は勝てる・・・というか変身して戦っていくうちに仮面ライダーとしての戦い方がだんだん分かってきたのだ・・・ありがとう神様（笑）って感じだった。

その後完全なる世界が影で大戦を操っていたことが世界中に発覚し、完全なる世界との全面戦争となる。

俺はその時、外で雑魚を一掃していて造物主との戦いには参加しなかった・・・というか出来なかった。

二次元駄神に止められたのである

前日に明日は逃げまくってやるぜと意気込んでいると後ろから二次元駄神に襲撃され、明日は造物主とは戦うなと言われた。

アレはこの世界の人間が戦うべき相手だから今回だけはお前さんは戦っちゃいけないと言われて嬉々として受け入れた・・・無論ただで言うことを聞くのもあれなので代わりにケータツチをくれるというので引き下がった。

ケータツチは魅力的だった・・・それに最初から造物主との戦いは俺もあまり参加する気がなかったし、むしろ大戦に出たくなかったし

早く終わらせたかったのでコンプリートフォームで暴れまくり、
『オールライダー』とかで瞬殺。

暇だったのでセラスさんとお茶を楽しんでいる間にナギが造物主を倒して、この大戦は終わりを告げた。

そのあともしこいつらといた2、3年は残念なことにめっちゃ楽しかった。ゼクトがいなくなったのは悲しいけどこいつらが俺の大事な友達なのは不変の事実だ。アリカさんを救ったりと色々忙しかったのがアレだけど、あと長い間散髪が面倒で髪が伸びっぱなしになった。

目が隠れるぐらい髪が長いです・・・のどかちゃんと被るなあなんて思いながらも、ようやく色のついたカードを使ってデンライナーを呼んだ。

このあとはもう俺がいてもできることは少ないから・・・未来に逃げることにした。というかアレ以上いたら絶対原作に巻き込まれる！！

2～3年の間にタカミチをいじりまくり、アリカ姫が戦犯扱いされ何もしようとしないうちにナギを説得してからだけど・・・手を出しすぎたかもしれない。かなり原作に巻き込まれかけている！

こついう時は逃げるに限るのだが、まあ一つ二つやりたいことがある。

・・・まずは大戦から12年程あとの京都で

詠春の屋敷に無断で侵入、デイケイドに変身してから一生懸命剣を振っている刹那ちゃんに後ろから話し掛けた。

「やあ」

「ひゃい！？」

急に後ろから話し掛けられたことにびっくりして飛び上がる刹那ちゃん・・・可愛いな

「あつ貴方は誰ですか！？」

おつめちやくちゃ警戒している・・・ふふからかいがあるぜ

俺はライドブッカーからカードを出しいつものように違う仮面ライダーとなる

『カメンライド・・・ブレイド!』

滑舌の悪さが売りのオンドルウさんだった。

掛け声は原作に合わせるべきだろうか? うん、ウェイを連呼するしかないな。むしろやらなければ!!

とりあえず

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

「なっ!?! ふざけるな!」

刹那ちゃんは姿形が変わった俺に驚きながらもすぐに立ち直り、果敢に俺に飛び掛かって来るが、さすがに俺も英雄と呼ばれた一人・・・この程度なら余裕である。

ブレイドの基本装備である醒剣ブレイラウザーで夕凧を弾く・・・もう夕凧を渡してるのかよっ!

過保護すぎだろ!?

刹那ちゃんは弾かれ、たたらを踏みながらも俺を睨みつけてくる・・・
・気に入らない。

「出し惜しみするとお嬢様が死んじゃうぜ？」

「なっ！？貴様！」

「川で溺れた時みたいに羽根を出すのを怖がると、手遅れになると言っているんだ・・・全力で来い」

「何故それを知っている！？」

刹那ちゃんは驚愕を隠し切れずに俺を睨みつけてくる・・・俺は殺気でそれを帰すと刹那ちゃん俺の強さを理解し、少し後ずさる

「いいからかかってこい」

「くっ」

刹那ちゃんは悩みながらもこのかちゃんが死ぬと言われたのを思い出したのか羽根を出して、空から攻撃してきた・・・こつちも飛びながら戦うか

俺はライドブッカーからカードを出し、ディケイドライバーに挿入

『フォームライド・・・ジャック！』

さあて本番開始だっ！！

背中についたオリハルコンウィングを広げ、空中へと飛翔し、刹那ちゃんの前に立ち、武器を構え目の前にいる刹那ちゃんを睥睨する。

刹那ちゃんは息を荒げながらも夕風を構えることをやめない・・・
いい根性だ

さすがにさっきの殺気に気づいたのか詠春が屋敷から出てくる、俺を見て口を開き呆然としていたが・・・

「さあ最後の一撃だ！こいつ！！」
「うおーっ！！」

刹那ちゃんは夕風を振りかぶり突っ込んで来たのでカードを使うか迷ったが、さすがにライトニングソニックは大人気ないのでやめて、普通に剣を構える。

「雷鳴剣っ！」

俺は雷鳴剣を左手で受け止め、夕風の柄を掴み刹那ちゃんごと地面に叩きつけた・・・詠春がジト目で睨んできたが無視する。気絶しそうな刹那ちゃんの近くへとより小さな声で「守るのは何も身体だけじゃないんだ。力だけじゃ何も守れない」そう呟き空へと舞い戻る。

守れる相手がいるのにそいつと一緒にいない刹那ちゃんが信じられない。いつだって世の中はこんなはずじゃないことばかりの世の中だからこそ、こんなつまらない生き方はして欲しくなかった。

まあ自己満足だけどねー守れなかった俺が言っても説得力ねえけど自分のくだらない思いに自嘲しているとかなりキレ気味の詠春がこ

ちらに向かってきた！

使用するコマンドは にげる しかない！！

「孝明っ！」

「ダレデスカ、ソレハ？そんな人知らないデス」

急いでデンライナーを呼び出し、飛び乗る・・・ふっ逃げ切ったぜ。
次はあそこか・・・正確な日時が分からんから張り込むか。

もう2つの用事を終えいざ未来に逃げようとしたのだが・・・
はあ

原作が始まる麻帆良学園に着き、俺は出口を学園長室と直結させ、
扉をノックし蹴り破る。

ジジイの入室許可が出る前に入ったのでめちゃくちゃ驚いていたが、
入ってきた人物に更に驚愕しているタカミチと困惑しているジジイ
がいたがんなことは気にしない。

「よお久しぶりタカミチ」

とりあえずあいさつ、あいさつはとても大事。お婆ちゃんが言うぐ
らい大事！！砂埃と返り血がついた袖をふってご挨拶。

「孝明さんっ！生きてたんですか！？どっかで野垂れ死んだかと・・・

・
」

久方ぶりにあった知り合いは割りと失礼だった。というかお前と会
うの死亡フラグ満載のあの時以来だから割りとシャレになつてない
な。うむ、あとで吊るそう、若干黒い決意を掲げながらもいまだ困
惑しているジジイに向き直る。

「誰かのう君は？」

ジジイは俺の正体を知らないようので、とりあえずにやりと笑いな
がら慇懃無礼に頭を下げ自らの名前を高らかに告げる。

「初めてお目にかかる『顔なき英雄』と言われたデイケイド本名、
林原 孝明だ。よろしく近衛翁」

「ほう！君がああ『顔なき英雄』かね？」

「ああ」

「今まで何してたんですか！？全く連絡もせずに・・・」

「タカミチうるさい・・・あとアルを出せアルを」

小うるさいタカミチを切り捨てここにいるはずの変態を呼びつける。

「おや気づいてましたか」

呼ばれると同時に部屋の隅からアルビレオ・イマがニヤニヤと笑み
を浮かべながら沸いてきた・・・ゴキブリみたいだな。タカミチは
目を見開いて驚愕を露わにしているのでアルがここにいることを知

らなかったようだ。

「久しぶりだなアル」

「ええ久しぶりですね・・・コウメイ」

「タカアキだっ！まあいい・・・・・・・・本題だが・・・・・・・・伝言
はいくつある？」

「・・・何の話ですか？」

惚けた顔^{とほ}しやがって！！

「二つあるんだろ？」

「・・・・・・・・。」

珍しく真面目な顔をしているので多分当たりだろう。

「ふうコウメイは・・・・・・・・」

「タカアキだっ！」

馬鹿にされている・・・昔からのあだ名を教えたのが間違いだった。
くっいつか貴様のコレクションを破棄してやるからな。

「そんなに落ち込んでないで、ずっと姿を消していたあなたが急に
どうしたんですか？」

アルが落ち込んでうなだれている俺を若干無視して、先程俺の質問
すら掻き消して何故この場に來たのかを尋ねてくる。

「求職だ」

「「「はあ？」」」

全員になんだこいつって目で見られた・・・しょうがないだろうが！
！本当の理由なんざ言いたくないし

「だから俺を雇え」

「・・・えつとまじかのう？」

「まじまじだ」

「いやこちらとしても、英雄を雇えるのはいいんじゃないか・・・その・・・
・・・なんでかのう？」

「ここでやらなければならないことがあるからだ」

俺は極上の笑顔を向け答えるとジジイとタカミチは固まり、アルは
ニヤニヤしてた。

「孝明さん・・・まさかナギの息子であるネギくんがくるの知ってますか？」

「ああだから来たんだ、来たくもなかったのに！！残念なことに補助が必要だとは思わないか？なあタカミチ？」

タカミチは俺にかかわれた（弄られた）記憶が蘇ったのか、若干青い顔をしながら頷く

「どうだ学園長？」

「許可しよう・・・ただし出来る限りの接触は・・・」「俺が紅き翼だと言わなければ問題ない」・・・むっ」

「そうだろ？」

俺は厭そうに引き攣りながら笑う、タカミチは完全に固まり、アルはすでにこの状況を楽しんでいた、ジジイはめちゃくちゃ悩みながらも結局納得したようだ。

翌日から俺はタカミチのクラスの副担任となる。本当に嫌だったけど

まあネギくんがくるのまであと三ヶ月・・・それまで楽しんでいよう。それ以降は地獄のような日々が待っているはずだし、基本的に約束を果たすのは修学旅行ぐらいからだろうし

2-Aはやはりというかめちゃくちゃうるさかった・・・あれアイツがいないな
サボりかな

まあいいや

ある人物の顔を見て泣きそうになったのはオジサンとの秘密だな

あああんなに笑顔を浮かべられるようになったなんて

《続く》

3話：はしよりすぎでしょ（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

タカミチはびびりすぎですwww

ちなみに最初はケータッチはナギとの仮契約で出てくるアーティフェクトにしようかと思ったんですが・・・やめました

まあ理由は気分ですが

ケータッチはアーティフェクトじゃ駄目だろとなんか思っちゃったんです

とりあえず次回をお楽しみに？

次回はエヴァちゃんを構いにいきますw

4話：子供先生推参っ！！（改訂）（前書き）

4話です・・・先に謝つときます

すいません

誤字脱字は報告お願いします

4話：子供先生推参っ！！（改訂）

エヴァをからかいに行こうとログハウスに向かっていたら・・・朝倉に捕まったorz

通称学園のパパラッチ・・・最悪すぎる

「質問です林原先生」

「はいドウゾ」

「担当の科目は？」

あれ言わなかったっけ？

あああまりにも騒がしいから黙らせようとして、ディケイドドライブに手をかけたらタカミチに外にたたき出されたんだ・・・

「現代文です」

「趣味は？」

「釣りと昼寝です」

・・・微妙な顔すんなよ

「特技は？」

「・・・特にありません」

変身とか言えないし

「年齢と身長体重は？」

「22歳で176cmの65kgです」

平均的で悪かったな

「今してる隠し事は？」

「言うわけないでしょ」

「チツ・・・どうして目を髪で隠しているんですか？」

「ファッションです」

「・・・」

「もういいですか？」

「はい・・・ありがとうございました」

朝倉はつまらなさそうな顔をして去っていった・・・悪かったな地味で

なんかエヴァちゃんを構う気も失せたので、タカミチをいじめにい

くことにした。

校内を探しているとなかなか見つからないので・・・しょうがない
ディケイドライバーに手をかけた瞬間

「孝明さんっ！」

タカミチが現れた・・・うんなんか察知能力があるみたいだ

「タカミチ暇だからかまえ」

「かまえって子供じゃないんですから・・・はあ」

なんかため息つかれた・・・子供扱いかよ

「ああそついえば学園長が今日の夜22時に世界樹前に来てくれっ
て言っていましたよ」

「ああ顔合わせてやつか魔法使いの」

「ええたぶん」

「模擬戦とかさせられるかな？」

「おそらくは・・・」

俺はタカミチに向かって悪魔めいた笑みを向けた。

「相手はお前だよなあ？」

「ええもちろん」

タカミチは何か覚悟を秘めた目で見てくる・・・つまらないな

「僕は貴方たちにどれだけ追いつけたかを知りたいんです」

「ふうん・・・」

いい目してるな
ムカつくほど

少し興が冷めたので大人しく夜になるまで自室で待ち、変身してから世界樹前に立った。

世界樹前にはすでに魔法使いたちが集結していた・・・あれ？うちのクラスのやつは誰もいないや

俺はジジイの横に立ち、騒ぎ立つ魔法使いたちを見回しているとジジイが魔法使いたちを黙らせて、俺に自己紹介を促してくる

「ではあいさつを」

「今日から見回りに加わるディケイドだ。よろしく」

シーンとした空気が広がっている・・・あれミスったかな？

すると次の瞬間爆発的な驚き声をあげ魔法使いたちが騒いでいた。

「まさかとは思っていましたが・・・本当にディケイドさんですかっ！？あの『顔なき英雄』と言われた!？」

うるさいガンドルフィーニ・・・タラコ唇を近付けるな

「ああ信用出来ないと言うなら力を見せよう、構わないか？」

一応ぬらりひょんジジイに許可をとる

「ああ構わんよ・・・失礼なこと考えとらんかったかね？」

「気のせいだぬらりひょん・・・タカミチっ!!前に出ろ」

俺は模擬戦の相手にタカミチを指名する・・・魔法使いたちもタカミチ以外に俺を相手出来るやつはいないと理解しているんだろう

タカミチは俺の前に立ち、ポケットに手をつ込んだ独特な構えをとった。

「１０秒だ・・・１０秒だけ様子を見る。それまで立っていたら本気でやってやる」

「・・・分かりました」

俺はライドブッカーからカードを二枚だしまず一枚目をディケイドライバーに挿入した。

『カメンライド・・・』

「では始めっ！！」

ジジイの掛け声と共にバンクルをスライドさせる。

『ファイズ！』

機械的な形状で身体に赤い線が通り、胸には銀の板がつき、ギリシ

ヤ文字の を模したデザインの仮面ライダーファイズとなる。
さらに二枚目を挿入しバンクルをスライドさせる

『フォームライド・・・アクセル!』

胸部の銀の板が展開し、肩の位置に移動し、眼は黄色から赤に変わり、身体を走る線は銀色へと変わる。

「いくぞっ!!」

『Start Up』

掛け声と共に俺は動き出した。

ファイズのアクセルフォームはあらゆる動作を通常の10000倍の速度で行うことが出来る・・・まあ10秒しかアクセルフォームでいられないけど

俺はタカミチの横に周り殴りかかる、しかしタカミチは横にいた俺に気づき俺に向かって無音拳をかましてきた・・・チツさすがに見えない拳撃を飛ばしてくるのは卑怯だぞっ!!

タカミチはギリギリ俺を目に捉えているが、たまに見失いダメージを喰らっている・・・まあその度にダメージを最小限にしようと受け流しているのが腹正しい

すると10秒が経ってしまった・・・畜生

『Time out』

変身がとけたただのファイズに戻ってしまう。

「はぁ・・・はぁっ・・・10秒耐えましたよ・・・」

息を荒げながらもまだ戦う意思を見せるタカミチ・・・なら本気だ

「タカミチ咸卦法を使え、全力で撃ってこい」

「っ・・・はいっ!!」

「ジジイこの結界を最大にしろ・・・しないとここ一体にクレータが出来るぞ」

「・・・はぁ承知した」

ジジイは少し悲しげな顔をして嫌そうに結界を強化していた・・・あとで殴る

俺はタカミチを倒すためにライドブッカーからある一枚を取り出し、

ディケイドライバーに挿入しバンクルをスライドさせる

『フォームライド・・・ブラスター！』

ファイズブラスターフォーム・・・全身が黒から赤に変わり身体を覆う線は黒に変わる、ファイズの最強形態である。

そしてファイズブラスターを構え、ライドブッカーからカードを一枚だし挿入する

『ファイナルアタックライド・・・フアフアフアイズ！』

「左腕に魔力・・・右腕に気・・・合成！！」

『フォトンバスターっ！！』

『豪殺居合拳っ！！』

フォトンバスターと豪殺居合拳は一瞬拮抗を見せたが、フォトンバスターが豪殺居合拳を飲み込み、放ったタカミチごと飲み込み、そのままこちら辺を覆っていた結界にぶち当たる

パッキーン

ガラスが割れるような音と共に結界は壊れ、結界に叩きつけられていたタカミチが地面に落ちてくる。

「がっ・・・」

タカミチはフォトンバスターの威力に衣服はボロボロになり気を失った・・・よく頑張ったな

だけど

「英雄はそこまで甘くないさタカミチ」

「そこまでっ！！勝者ディケイド！！」

ジジイの声とともに模擬戦は終了した

「これからはよろしく頼む」

そう言っただけでカメラを解きディケイドの姿に戻り、その場を去ろうとするにつれてくるやつというか・・・だいたいの魔法使い・・・
・お前ら暇すぎだから

こういう時は・・・何故が入っていたアレで・・・

『アタックライド・・・インビジブル!』

元はディケイドと対をなすライダーディエンドの物だが何故かライドブッカードに入っていた。

姿を消して、魔法使いたちを撒いて、とりあえず間借りしている自分の家に帰る

だりいー

なんかエヴァちゃんがかまう気が失せたなあ・・・ネギくんが来るまでいい子ぶって真面目に教師でもしてるか・・・はぁ退屈だなあゝ

言った通り三ヶ月の間俺は耐え続けた・・・口調を変え、敬語を使い・・・一人称も俺から僕に変え、なんら問題を起こさず、ずっという先生を演じていた・・・頑張った、頑張ったよ俺

そしてジジイから学園長室に呼び出された

内容は・・・子供先生の補助・・・ニヤリ

待ってたぞ――――――――――
――――――――――っ！！

学園長室をノックしジジイの入室許可を待つ

早く早くしろジジイっ！！

「・・・入りたまえ」
・・・なんだその嫌そうな声は、アドベンドして襲わせるぞこのぬ
らりひょん

「失礼します」
とりあえず顔を微笑ませ、学園長室に入室・・・我獲物を見つけたり
俺がネギくんをガン見していると、タカミチが俺の顔面に無音拳を
放ってくる。

それを無音拳をぶつけ相殺させた・・・ふふふ甘いな、俺は日々成
長するぜっ！！

無音拳同士のぶつかり合いによりパーンと空気が弾けるような音が学園長室に響き渡り、ネギくんそしてその場にいた明日菜ちゃんとかのちゃんもびっくりしていた・・・ちつ余計なことをしたか

「ゴホン・・・今日から君を補助する林原 孝明です。よろしくお願ひします」

「あついえ・・・こちらこそ願ひします」

笑顔を浮かべながら手を差し出してネギくんと握手をした・・・タカミチは苦笑いをして、ジジイは引き攣った顔をしていた

小声でタカミチに「あれは誰かな？」とか聞くんじゃねえ!!

がっちりネギくんと手を握り合う

にひっ虐めてやるぜ

こうして俺とネギ・スプリングフィールドは出会った。

《
続
》

4話：子供先生推参っ！！（改訂）（後書き）

すいません

エヴァちゃんとの絡みはもう少し先です

次回はネギくんを玩具に楽しむ孝明

果してネギくんは孝明の手から逃げられるのか！？的な感じの予定
です

うん曖昧すぎる

楽しんでいただけたら幸いです

5話：孝明大いに遊ぶ（前書き）

5話目です・・・連続投稿ですね

というかもう一つの方のネタが浮かばず、ついこちらを書きまくる
今日このごろ

まずいなあ頑張ろう

誤字脱字は報告お願いします

5話：孝明大いに遊ぶ

ネギくんを連れて2年A組に向かっている途中、クラス名簿を渡しながら他愛もない話をしてネギくんの緊張を解いていった・・・ガチガチでなんかあってもつまらないし

そして2年A組の教室に到着・・・罨を確認してニコニコしながらネギくんに先に行くよう促す

ネギくんは覚悟を決めて教室に入ると・・・ネギくんの頭上から黒板消しがふってくる、しかし一度ネギくんの頭上で止まり、再び落下してネギくんに直撃した・・・クツクツクツ

「ゲホゲホ

いやーあはは、なるほどゲホ
ひっかつちやったないゴホ」

などと笑いながら宣っているが甘いな

ネギくんはその先に張ってあったロープに引っ掛かり

「へぶつ!？」

あぼ

あああああ

ぎゃふんっ
」

と言う鳴き声とともに全てのトラップに引っ掛かった・・・くっナイスだ春日に鳴滝姉妹。今度のテスト+10点あげよう

クラスに笑い声が響き渡り、少し経ってからようやく罠にかかったのが子供だと言うことに気づいたようだ

みんな慌てて無事を確認している・・・あるえ？俺のときはガン無視してなかったか？

とりあえず教壇にネギくんを立たせ、自己紹介をさせると

「「「「キヤツアアーか・かわいいー」」」」

と言って何人かがネギくんに飛びつき抱きしめている

さらに質問責めにもあっている・・・ああこれが若さかなどと自虐しつつ自分のときとの態度の差で悲しくなった。

少し遠い目をして外を眺めていると

明日菜ちゃんが先程黒板消しが空中で一時停止した件についてネギくんを問い詰めている・・・面白そうだから無視していると

雪広あやか通称委員長が明日菜を注意して、何故かバトルが始まっていた・・・面白そうだから無視していると

「先生止めなくていいんですか？」

と長谷川千雨が聞いてきたので

「いや面白いからいいんじゃないかな・・・ちうちゃん」

「なっ!？」

とりあえずハンドルネームを言ってみると、驚き俺から離れていく・・・むつつまらん

さすがに五月蠅いので注意をすると皆大人しく席に戻っていく、そして授業が始まると明日菜ちゃんがネギくんを消しゴムで狙撃していた・・・クツクツクツ最高すぎる。

アレは痛いだろ

次はこれがいいな

「はい次はこれがいいかと」

「あつども・・・よし次こ・・・そ・・・」

俺は明日菜ちゃんにパチンコ玉を手渡す、すると明日菜ちゃんは誰に渡されたのかを確認して硬直した。

「狙うならお尻がいいですよ・・・いい声で鳴いてくれるはずですよ」
「そうですか。やってみます・・・って違う!!」

おおノリツツコミとはさすが明日菜ちゃん

「先生なら普通は注意するでしょう!？」
「いえあまりにも面白かったんでつい・・・くっ」

含み笑いをしていると周りも俺が何をしていたか気づき困惑したよ
うな目付きをしている・・・たぶんこの人こんな人だったわけ? 的な

ええまあ猫被ってましたから、かなり分厚い毛皮着てましたから!!

ああ解放的で楽しい・・・

「授業がもうそろそろ終わりそうなので、今日はこれでおしまいに
して残り時間はネギくんへの質問タイムとします」

なんて暴挙を実行してみた。

するとみんなは目を驚きで溢れさせながらもネギくんへ特攻してい
った・・・ネギくんはあうあう言ってるよ。

俺はいい玩具手に入れたなあゝなどとニヤニヤ笑っていた。

放課後

どうせ今日は、明日菜ちゃんに魔法がばれるだけだからなあゝと思
いつつも監視

おっのどかちゃんがふらふらしてる
あっバランス崩した、ネギくん登場！

魔法を使つてのどかちゃんを空中で停止させて

はい明日菜ちゃんに見られた・・・おっ連行されていったな

ここで俺はデイクイドライバーに手をかける

するとタカミチが飛んできた・・・やはり何か察知能力があるな

「何してるんですか!？」

「タカミチっ!!大変だ!!あそこの茂みでネギくんと明日菜ちゃんが!！」

俺は慌てたように二人が入っていった茂みを指差す、するとタカミチは様子を見てくると言つて茂みに入つて行つた・・・馬鹿めwww

いやぁ～と言つ悲鳴が聞こえたので逃亡を開始・・・うん、逃げるに限る

このあと何日かタカミチが俺の言うことを信じなくなったのは言うまでもない

遊び終わり学園から出ようとすると千雨ちゃんが歩いていた・・・

からかうことにしたのは言うまでもあるまい

「やあ長谷川さん」

「っ……さようなら林原先生」

千雨ちゃんは俺の登場に驚きながらも、逃亡する構えをしている・
・甘いな！

「今からネギくんの歓迎会だけと出ないのかい？」

「……体調が悪いので」

「それは大変ですね……家まで送りますよ」

「えっ……いや結構です」

千雨ちゃんは自分の失言に気づき舌打ちしながら、さらに逃げようとする。

「僕は貴女の担任ですからね。放って置くわけにはいきませんよ」
「本当に大丈夫なんで……」

さらに逃げようとする……むうつまらん
しょうがない

「止まれ、長谷川千雨」
声のトーンを落として、脅すように言うと千雨ちゃんは俺の態度の豹変に驚き硬直した。

「君はこの世界というかあのクラスが普通じゃないと感じているんだろう?」

「……………」

千雨ちゃんは黙って俯き始める

「普通じゃないのに、何も言わない周りを不思議に思っているんだろ?」

「……………」

「どうしてか知りたくないか?」

そついうと千雨ちゃんはこちらに振り向き俺を見据える

「あんたは知ってるのかよ」

「ああ知ってるぜ」

「チッ」

千雨ちゃんは舌打ちして完全に俺と向き合う

「それがあんたの素か?」

「千雨ちゃんの素もなかなか素敵だね」

「ふんっ」

からかうと千雨ちゃんは俺を睨みつけてくる

「で本題だ。知りたくないか、長谷川千雨？」

「・・・知りたいさ、でもそんなことただで教えてくれるのかよ！？」

「ああ」

「なんでだ？」

そんなの簡単さ

「お前がつまらなそうで、不安そうだったからだ」
「なっ」

俺の周りにいてつまらなそうな顔をしているなんて許さん

「自分が周りと違うことが不安だったろ？分かるよその気持ち、この学校変人多いからな・・・特にうちのクラス」

「・・・」

「大丈夫はまともだよ」

「・・・そうか。私は変じゃなかったんだな」

「ああコスプレを楽しんでいる以外は・・・」

そついうと千雨ちゃんはプルプル震えはじめ殴りかかってきた。

「うるせえっ！！というかなんで知ってんだこの腹黒教師！！」

「Hahaha何をいう腹黒コスプレ娘、俺ほど純粋な大人はいないさ」

「黒く純粋なんだろうが！！」

うむナイスツツコミ

「まあ冗談はともかく・・・君には二つの道がある。一つは真実を知り今までから違う生活をする事

もう一つは記憶を書き換えて、さらに認識妨害を強めて今まで通り生活すること

さあどっちを選ぶ？」

俺の質問に千雨ちゃんは黙り考え込んでいた

「まあ一日だけ時間をあげるさ、ゆっくり考えな」

俺はそう言って手を振り千雨ちゃんから離れた。

この後することもないので家で爆睡

次の日、千雨ちゃんは覚悟を決めたらしく俺に話を聞きにきた・・・面倒だったが、話をはしよりつつ魔法について話すと（もちろん俺が英雄だなんて話はしない）一応納得してくれ、誰にも話さないことを約束させた。

そしてホレ薬事件とお風呂事件には関与せず、その日を過ごした・・・関与したら笑えないことになるのは目に見えてたからなあ

次の日の居残りもすることがないので、普通に過ごしていた・・・しかしその次の日、関与する気がなかった事件に巻き込まれた。

そう高校生たちとの場所取り事件である・・・最悪すぎる。

休み時間なるべく目立たないところで昼寝をしていると・・・

『高校生アタック』というアホな声とともに「あ」という声が聞こえ、バウンドしたボールが俺の顔に直撃した・・・潰す!!

俺はボールを拾い、明石をその場から引きずって退かそうとしている馬鹿女に向かってオーバーヘッドキックで玉を飛ばした。

するとボールは馬鹿女の頬をかすめた、馬鹿女はボールを蹴ってきた人物を探しだし、俺を睨みつけてくる

俺は馬鹿女に近づき明石を引きずっている手を掴み、離させる。

「お前らが遊んでたボールが俺の面に当たったんだが・・・どう落し前つけるつもりだ？」

「っ・・・それは失礼しました。しかし今、この子たちと話があるので少し下がってくれませんか」

馬鹿女はいつもと態度が違う俺にびびりながらも意見してきた・・・絞める。

いらついたので髪をあげ、オールバックにしてめちやくちや睨みをきかせる

「あっ？この子らの担任は俺だ。なんか話があるなら俺を通せよ」「っ・・・」

完全に俺の眼光の鋭さにのまれて何も言えなくなった馬鹿女は「失礼します」と言って去って行った・・・やっちゃった、あまりにもム力つくからつい素の口調で

俺は恐る恐る後ろを向くと、めちやくちゃ目を見開いた大河内と明石がいた・・・くっ

俺は二人に近づき

「このことは内緒な」

と言うと二人は首を縦に振ってくれたので

「サンキュー」と言っただけ乱暴に頭を撫でた・・・うんフラグ立てちゃった。

こちらに向かってくるネギくんたちが見えたので足早にその場を立ち去り、再び昼寝場所を求めて屋上へと向かう

しかし俺は忘れていた・・・まだ事件が続くことを・・・

《続く》

5話：孝明大いに遊ぶ（後書き）

どうでしたか？

楽しんでいただけたら幸いなのですが・・・

まあいいです

あまりこころへんの原作に関わる気のなかった孝明くん

しかし作者の力で運命なんて捻曲げますwww

次回もフラグたてまくりですwww

お楽しみに？

6話：・・・ついやりすぎた（前書き）

感想ありがとうございます

これからも頑張ってください？

今回も暴走しましたwww

誤字脱字は報告お願いします

6話……ついやりすぎた

「胸のピストル鳴らして」

「キャア〜可愛い」

「やけに鼓動が邪魔する」

「ねえ私たちの担任になってよ」

「落ち着いてられないそんな事情」

ガチャッ

「……ん？」

「あ……」

「解きかけの方程式」

「あら

また会ったわねあんな達
偶然ね（ハート）」

「むっ……」

「高等部2 - D」

うるせえから続き忘れたし・・・なんだっけ？

屋上で昼寝をしていたらさっきの馬鹿女たちのクラスがやってきたのでおとなしく歌を唄っていたら、うちのクラスが来やがりました・
・アレ？イベント続いたんだ。

「ハクシュン！！」

おお玉葱小僧のエロ風攻撃だ・・・俺も風属性の魔法覚えようかな

ああでもWいるから問題ないか・・・

そんなことを考えていると、ドッジボール対決することに・・・
11対22とか

馬鹿だな明日菜ちゃん・・・さすがバカレッド

うるせえ茶々丸！！花火なんかあげんなっ！！爆発したの俺の真ん前だったぞ！！

「ナイスアスナー（ハート）」

「よろしいですわ

このケンカ絶対勝ちますわよ!!」

「OK!!」

おうもう始まっている

今明日菜ちゃんが一人当てたから10対22か

「行くわよ!子スズメ達
必殺・・・・・・・・」

馬鹿女がボールを構えるところのクラスは騒ぎ出した。

「それっ」

そして馬鹿女が普通に投げたシュートに普通に三連続で当たる始末・
・アホか

さらに今度は四人アウト

でようやくドッジボールで数が多いのは全く有利じゃないことに気づいたお馬鹿なうちのクラス・・・やっぱ副担任やめようかな

おお後ろ向いてる鳴滝姉妹の妹に当てやがった・・・あの卑怯加減は好きだな

「ドッジボール関東大会優勝チーム麻帆良ドッジ部「黒百合」！」

正体を明かした馬鹿女ズ・・・ブルマか、俺ドッジ部の顧問になるうかな

アホなこと考えているうちに委員長が普通にアウトにされていた・・・
・お前身体能力高いんだから頑張ろうよ

でいつの間にか10対11

追いつかれてるな・・・

「必殺・太陽拳!!」

「・・・しまった

太陽を背に・・・!?!」

馬鹿女が太陽を背にしてボールをバレーみたいにスマッシュして明日菜ちゃんにボール当てアウトに・・・

本当にその卑怯加減大好きだわ

だけど・・・

「もう一撃!」

「あんっ」

「なっ・・・二度も当てて!?!」

それはいただけないな・・・カチャッ

「孝明さんっ!？」

後ろからタカミチが現れた

ちっタカミチめ

本当にリーダーとかついてんじゃねえのか？

「お前見てたのか？」

「ええ・・・」

「俺は卑怯やズルは大好きだけど・・・楽しめない卑怯やズルは大嫌いだ。だからどけ・・・

あいつらにはお仕置きが必要だ」

「いえまだ待って下さい・・・お願いします」

魔法を使おうとしていたネギくんを明日菜ちゃんが引き止めていた。

「スポーツでするして勝っても嬉しくないのよ

正々堂々いきなさいよ・・・男の子なんですよ」

「あ・・・アスナさん・・・」

ちっ・・・あんなこと言われたら手を出すわけにはいかない・・・

「OK・・・明日菜ちゃんに免じて退いてやる」

「すみません・・・あとで彼女にはよく言っておきます」

馬鹿女ざまぁ・・・でも俺の気が晴れないなぁ

「みんな!!いくよ!!」

「」「」「うんっ!」「」「」

まっせいぜいフルボッコにされる馬鹿女ズを楽しむか・・・

馬鹿女ズはまず本屋ちゃんたちによるルール攻撃でボールを取られ、大河内のボールで一人アウト

さらに和泉が相手が投げてきたボールを蹴り返して相手にあてまた一人アウト

さらにさらに明石が浮いたボールを地面に叩きつけるような投げ方でまたまたアウト

今度は佐々木が相手が取ろうとしたボールをリボンで奪って、リボンを操りボールを当て更に三人アウト・・・ルール違反くせえ

で最期に古菲が「チャイナダブルアタック」とか言って二人アウトに・・・最終的に3対10でうちのクラスの勝ち

ざまあみる馬鹿女ズ・・・そう思い屋上の上で胡座をかいてニヤニヤしてると

馬鹿女が動き出し

「まだロスタイムよっ!!」

とか言ってボールを打ち上げバレーのスマッシュをアスナに向けて放とうとしている・・・まあネギくんがいるから大丈夫だろ思っ
てネギくんを見たら

のどかちゃんたちとダベってやがる!?

まずいっ!・・・そう思い屋上の上から飛び降り走り出したら、千雨ちゃんが明日菜ちゃん突き飛ばして身代わりになっている。

あのバカ娘っ！！

こんなときにくだらない犠牲心出しやがって！

周りが急な俺の登場に驚いているがそんな場合じゃない！！

ギリギリ間に合い千雨ちゃんを覆うように抱きしめ、飛んできた球を背中につける

「ぐっ」

いてえ・・・というか原作と違う・・・というか腹立つな、あの馬鹿女

なら

「がっは・・・ごふおっ・・・」

俺はまるで致命傷をうけたかのような咳込み方をして、胸を抑えポケットから血糊の入ったカプセルを取り出し口に含む

そして千雨ちゃんを離して、カプセルをかみ砕く・・・俺の口元か

らは血糊が垂れ、まるで今受けた痛みで血が出たかのように見える。

「救急車!!」

「やばくない!？」

「ちよっ血が・・・!!」

などと騒いでいる・・・がまだ終わらん

「かはっ!・・・ぐっは・・・た・・・す・けて・・・」

そのまま倒れ、ポケットに入っていた血糊パックを割り当たりに血の池を作り、這って馬鹿女ズに近づいてみる

馬鹿女ズは青ざめ、悲鳴をあげて逃げていった・・・ふっざまあみる。

俺は普通に立ち上がり、血糊の着いたシャツを見て

「ふむ洗えば落ちるかな」

などと言っていると

後ろから大量の視線を感じた・・・恐る恐る後ろを振り向くとうち

のクラスの方たちがすごいジト目で俺を見ていました・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」x31+

「・・・・・・・・すいませんやり過ぎました」

とくに和泉がやばい・・・血を見て気絶する一歩手前だったらしく、その怒りは相当なものである。

そして明石と大河内も心配したらしくめちゃくちゃ睨んでいる

タカミチは苦笑いしてやがる・・・死なす

「いやアメリカンジョークってやつだね！H a h a h a」

その後屋上で三時間程正座させられ、生徒に交互に怒られたのは言うまでもあるまい

・・・全部馬鹿女のせいだ！！

俺は八つ当たりすることにした……クックックク

放課後

まだ学校の中で騒いでいる馬鹿女を発見

「きいゝ悔しい！あのオサルさんたちめっ！」

などと言っている馬鹿女の前に木の上から飛び降りる

「なっ！？なんですか！？」

ちなみに今の俺の格好は本格的な狐のお面に黒いロングコートで不審者丸だしである。

俺は馬鹿女ににじみよる

「けっ警備員を呼びますよ！？」

馬鹿め警備員など全員気絶させたわ！！

「ひっ！？」

馬鹿女の横をすれ違う

「えっ！？あれ？何もされてない」

ふっ甘いな・・・俺にはラカン直伝のあの技がある！！

無音脱がし術！！

俺は奪い取ったものを振り回す

「なっ！？それは私の！？」

そう馬鹿女の黒い派手なパンツを

「かつ返しなさいっ！！」

「H a h a h a」

俺は高らかに笑いながら更なる技をみせる

ラカンそよ風爆風拳v r・孝明！！

初代仮面ライダーの変身ポーズを取った後

腕を振るい風速100kmの風を発生させる！

しかし対象者の周囲の風はそよ風となっています！！

完全にスカートめくり専用の必要です！！！！

馬鹿女は慌てふためき、一生懸命スカートを抑える

「キヤアアアーっ！！」

「ふっははははは」

俺は悪役のような声をあげながら、腕を振るい続ける

「ガッハハハー・・・ひむらっ！？」

調子に乗りすぎて、後ろから来ていた千雨ちゃん気づけず、顎に跳び膝蹴りを喰らい崩れ落ちたorz

ちなみに馬鹿女は騒ぎすぎて気絶

「何やってんだ！？腹黒教師！！」

何故バレた！？
変装は完璧なはず！？

「いや八つ当たりを・・・」
「アホかつ！！」

そう言つてorzみたいな格好になっている俺の側頭部を蹴り飛ばし、後ろ襟を掴んで引きずっていく千雨ちゃん

「ドナドナドナ」

「うるさいっ！！」

鞆で頭を叩かれた・・・ううなんか暴力的に

まだ接触するのは早かったか？

なんか俺ラカンみたいな扱いになつてし・・・

そして再びドナドナを歌いだしたら、川に落とされたorz

《
続
》

6話：・・・ついやりすぎた（後書き）

やり過ぎましたw

普通にセクハラで捕まるレベルww

今回はお楽しみいただけでしょうか？

ドッジボール編は色々ネタが浮かんでたんですが・・・一番孝明ぽ
ついのにしましたwww

次回もお楽しみに？

7話：罪と罰・・・酷くね？（前書き）

はい遅くなってすみません

誤字脱字は報告お願いします

7話：罪と罰・・・酷くね？

「おはよう明石に大河内」

「おはようございます」

「なんだ遊びに行くのか？」

「はい、ここでまき絵たちと待ち合わせしてて・・・先生は何してるんですか？」

「何してるように見えるよ？」

「・・・分かりません」

「まあ分かれたら困るけどな・・・」

俺が今何してるかって？

道の端っこで「自分は悪いことをしました」ってプラカードをつけられて正座してるとこだ・・・

ちなみにこのプラカード外そうとすると『このアイテムは呪われている』とか出て来て外せなかった。うぜえ

「なんでそんなことに？」

「ああ昨日ちよつとな・・・」

ええまあ昨日の八つ当たりをチクられて、さすがに怒られました・・・しずな先生に

タカミチとジジイだったらシカトするけど・・・しずな先生は無理まじ怖かった

「何したんですか？」

まあ暇だったから正直に答えるか・・・

「昨日の馬鹿高校生に嫌がらせをしてきた」

「そんなことさせられるぐらいのことしたんですか？」

「いや、ただ穿いてたパンツをパクって見えるか見えないかギリギリのラインまでそよ風を発生させ続けた！すごくね？パンツ取るとき気づかれなかったぜ！それなのに正座とかなくね？」

「・・・」

あるえ？なんかジト目で見られてる・・・ここは褒められるんじゃないのか？

「「当たり前です!!」」

そうして二人はどこからか持ってきた大きな石を俺の上に乗せてきた・・・死ぬ！死ぬ！まじごめんなさい!!調子に乗りました!!

悶えていると和泉と佐々木がこちらにやってきた。

「おはよう和泉に佐々木」

「「おはようございます・・・」」

和泉と佐々木はなんか不思議な顔をしている・・・なんかおかしかったか？

すると明石が

「先生髪と口調が違うから二人とも誰か分かってないですよ」

・・・しまった、今髪かきあげてオールバックみたいにしてたんだ。
折角被っていた猫が・・・

片手で顔を覆い、空を見上げて絶望する・・・やっちゃったよ
今すぐ壁に手をあてて次郎くんと一緒に反省したいぐらいだ

「ゆーなとアキラの知り合い？」
「誰なん？」

「言っている？」

と聞いてくる明石に俺は空いている手を追い払うように振った・・・
肯定である。

「林原先生だよ」
「はあ？」
「だから私たちの担任の林原先生」
「ええ〜〜〜!!」

そんなに驚くことかよ・・・

「本当に林原先生ですか？」

「俺はお前たちの副担任の林原孝明だよ」

「ホントにホントですか？」

「ああなんなら佐々木のこの前のテストの点数を言ってみようか？」
「遠慮します！！」

二人はまじまじと俺を見つめていた・・・珍獣かよ

「で先生はなんでそんなことをしてはるんですか？」

「ええと・・・」

さつき怒られたばっかだから・・・

「実は・・・」

「ちよっ大河内さんっ！？」

大河内が二人に話し始めやがりました・・・二人は最初は驚いた顔をして、最後はジト目になり・・・やはり石を追加されました。

「ちょっとなんでこんな増えるわけ！？俺の扱い酷くない！？俺をなんだと思ってるの！？」

「「「女の敵です！」「」「」」

「・・・すみません」

四人は呆れたような顔をして俺を見つめている・・・やめてこれ以上いじめないで・・・

「さっきのはともかく・・・昨日はありがとうございました」
「ありがとうございます」

そう言ってお礼を言うてくる大河内と明石

「何の話だ？」

「昨日助けてくれたでしょ？そのお礼」

「はっ俺はただあの女がムカついたから・・・痛い！痛い！！石追加しないで！！」

「全く素直じゃないなあ」
「本当にね」

「はっほらさつさと遊びに行け」

俺は追い払うような手つきを四人に向けてした・・・すると

ピーピーピー

俺の携帯が鳴りはじめた

「悪いけどポケットから取ってくれないか？」

四人に頼み携帯を取り出してもらい、通話にする。

「はいもしもし」

『ふおふおゝ罰はどうか？』

「ジジイてめえ今度はてめえの孫を標的に・・・すいません嘘です」

周りからの重圧が酷かった・・・というか石を拾いに行こうとしている

『誰かいるのかのう？』

「まあ問題ねえよ、で用件は？」

『今から正装をしてある場所にきてくれたら罰をなくしてやろうか
と思ってな』

「是非!!」

『ふおふおなら・・・』

場所を指定され、力がみなぎってくる・・・よっしゃあーっ！！地獄から抜け出せるぜ！！

電話をきり立ち上がる

「どうしたんですか？」

「ふっ無罪になったぜ！！」

「・・・・・・・・」×4

「反省はしているが、後悔はしていないっ！！」

「・・・・・・・・」×4

「嘘ですごめんなさい」

俺は下手に出まくり、なんとかその場を離脱・・・もちろん口止めは忘れない。

代わりに何かを奢ることになった

急ぎ足で家に帰り、何故か外れるようになったブラカードを取りスーツを着て、髪を完全にあげ指定された場所に行くとジジイが待っていた。

「少しここで待っていていくくれぬか？」

そういつて和室に通された・・・なんかお偉いさんに会わされんのかなぁなんて考えていると、ジジイが帰ってきた。

後ろには着物を着た女の人がついて着ている・・・誰だコイツ？

「ジジイなんのつもりだ？」

女の方は俯いていてあまり乗り気じゃないのがまるわかりである。

「お見合いじゃよ」

ジジイ・・・死なす

「なんでお見合いなんかしなきゃなんねえんだよ？」

「お前さんもそろそろ結婚した方がよろう・・・で相手を用意したという訳じゃ」

ジジイはふおふおと笑っていやがる・・・殴る

「こんな綺麗な女の方は俺には勿体ないからパスだ。それに相手が嫌がつてんに無理矢理連れてくんなクソジジイ」

「ふおふお相変わらず口が悪いのう。まあせめて名前の交換だけでも・・・のう？」

ジジイはしないと正座地獄に戻すよ？ 的な顔で見てくる・・・夜道には気をつけるよ

「ちっ・・・林原孝明だ」「近衛このかです」

「「はっ？」」

俺は顔をあげた女の人の顔を近寄ってみると、女の人もまた近寄って俺の顔を見てくる・・・ちよっ

「近衛か？」「先生なん？」

「「はあゝ！？」」

「「どういうことだジジイ?!」」

俺はジジイに詰め寄り

「ほんまに先生なん!？」

このかちゃんは俺に詰め寄る

「ふおふおその男は本当にこのかの副担任の林原先生じゃよ」

ジジイはニヤニヤしながら言うてくる。

「ジジイ・・・てめえ孫娘を教師に差し出すとはいい度胸だな？学校を焦土に変えてやる」

「ふお！？落ち着きなさい林原先生、なあにちつと顔見せ程度にする気じゃったんじゃが・・・つい」

ジジイ・・・

「ほえゝ林原先生ホンマはこんな喋り方なんやな」

「ぐつ近衛この事はクラスの奴らには内緒な」

「どないしようかな」

このかちゃんは俺の反応を見て楽しんでやがる・・・くつなら

「黙っていてくれたら金輪際ジジイにはお見合いをさせないことを約束させよう」

「ホンマ!？」

よしっ食いついた!!

「ああもちろんだ・・・なあジジイ」

「ふお!？」

逃げようとしているジジイを捕まえ、約束しないと学校を塵芥に変えるぞと脅す。

「・・・承知した」

ジジイは嫌そうに約束した・・・勝ったぜ

「先生ありがとうな!!」

そう言っこのかちゃんの手を握ってくる・・・顔近いっ!!

「気にするな・・・それより約束忘れるなよ？」

「うん・・・にしても勿体ないな」先生そっちの方がカッコええの

に・・・」

「いいんだよ目立つの嫌いなんだから・・・」

大いに嘘です

目立つの好きです

でもまだバレるわけにはいかないのだ!!

「そうかゝなら秘密やなあゝ」

そう言つてこのかちゃんは少し嬉しそうな顔をしていた・・・フラグ立ってしまったのか!?

というかお見合い事件が別の形で発生しやがつた!!

なんか微妙に原作とズレてきてるなあゝ

などと思いつつジジイの奢りで高級なものをこのかちゃんと一緒に食べまくってやった・・・ジジイ涙目。ざまあ

「ほななコウメイ先生」

「タカアキだっ！！」

なんかコウメイがミドルネームみたいになっていやがる・・・畜生
アルめ

そして多少上機嫌で家に帰ると・・・荷物が全てなくなっていた。

「なんでや」

《続く》

7話：罪と罰・・・酷くね？（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

なんかこのかちゃんとフラグを立てた孝明くん

次回はやっとかさエヴァちゃん

今度こそエヴァちゃんの予定です

次回もお楽しみに？

8話……まじすいません

「クソムシが」

「すいません」

「ゴキブリにも劣る男だな貴様は」

「すいません」

「ミジンコ以下の存在価値しかないな」

「いや……それはいいすぎではない」「ああ？……すいません」

目の前に仁王立ちしているのはエヴァちゃん

目は俺を殺さんと爛々と輝いている

今何故俺が正座で昨日とは違うプラカード（「自分は人間的に最悪な男です」と書かれている）をつけているかという・・・

ああちなみにこれも外そうとすると「孝明は呪われていて装備を外すことは出来ない」と表示されます

く回想く

昨日家の荷物を全て勝手にジジイに引越させられたことから始まる。

俺はもちろん抗議にいった・・・ディケイドライバーを装着して

ジジイ曰く、学園に近くていい住居が見つかったから、そこに荷物を移してくれたらしい・・・ただで

なんとなく怪しかったので聞いてみるとその人手が足りないから手伝って欲しいとのことであつた。

しょうがないので引き受け（もちろんそれなりのものは頂いた）、
目的地に案内されると・・・・・・・・女子寮であった。

俺はすぐにデイケイドに変身して、学園を焦土に変えようとしたら
ジジイからのテレパシーみたいなもの念話で昨日の罰をサボったのをしずな先生にチクると
脅されて

やむなく、女子寮に入る（もちろんジジイはフルボッコにした）・
・しかしあまりのうるささにいらつき家出をした。

夜中もめちゃくちゃ五月蠅いし大浴場には入れないし・・・・いる意
味ないし！！

そして女子寮を出て、図書館島のアルの部屋に住むことにした・・・

しかし長くは続かなかった。

アルのやつ、俺の人生を收拾して、目の前で読みはじめやがりました・
・そしてかなり不快そうな顔をして、憐れみの目を向けてきたので思わず家出

俺の人生はネギくんのように悲惨なのではなく、ただただ不快なの

だ・・・20歳まで自殺しなかったのが不思議でしようがない。

で嫌がらせを兼ねてエヴァちゃんの家を訪ねることにした。
ログハウスの前に立ちノックをして返事を待っていると

「はい、少々お待ち下さい」

と茶々丸ちゃんの声が聞こえ、すぐに扉が開けられた。

「こんばんわ絡繰さん」

「こんばんわ、林原先生・・・どのような御用でしょうか？」

茶々丸ちゃんは首を傾げ、普通に聞いてくる。

「今日マクダウェルさんと絡繰さんがお休みの間に、新しい配布物があつたのでお見舞いついでに届けにきたんだ」

「少々お待ち下さい」

茶々丸ちゃんはエヴァちゃんの許可を取りに部屋の中に戻っていく。
・・・ああ早く弄りたいなあ」

「先生お上がりください」

茶々丸ちゃんはエヴァちゃんの許可をとれたらしく、戻ってきて入室を促された。

部屋の中に案内され着いていくと、テーブルの上で紅茶を飲んでいるエヴァちゃんがいた。

「こんばんわマクダウェルさん・・・具合は良さそうだね」
「ええ少し体調を崩した程度なので」

うん猫被りだなあゝ

というかなんであげたんだろ？
エヴァちゃんだったら玄関で帰しそうなのに・・・

まあ部屋の隅にある逆さにしてある箒とか今だされたブフ漬けとか明らかに早く帰れて言外に言われてるけどさ・・・

「あつ・・・これが配布物です。これを主体に今後授業を進めていきますから、絡繰さんの分もありますので・・・」

そう言って俺は特製のプリントを二つエヴァちゃんに渡す・・・クツクツクツ

エヴァちゃんは興味がなさそうな顔をして受け取り、読みもせず横に置いた・・・ええ読まないの？

超面白いのに・・・

エヴァちゃんは早く帰れと言わんばかりに、玄関と俺を交互に見つめてくる・・・失礼すぎる。

「少し黙読して見てはくれませんか？実はそれが僕が書いたものなので」

とりあえず読むように促す・・・興味持ってくれるかなあ・・・
おっ

「へえこれを先生が・・・ねえ」

そう言つて1ページ目をめくり、エヴァちゃんは硬直した・・・そしてずくに読みはじめ、プルプルと震え始める。

ふむお気に召さなかったのかな？

「先生・・・これは先生が考えたんですか？」

おつめちやくちや低いトーンの声になっている・・・ぷっぷっ流石に気づくか

「ええどうですか、その《キティちゃんの冒険》は？是非感想をお聞きしたいのですが・・・」

「・・・・・・・・」

エヴァちゃんはプルプル震えながら、魔力で作った刃を俺に向けてくる・・・やりすぎちゃった、てへっタカアキ反省

まあこれだけじゃ終わらせないけど・・・

魔力で作られた刃を無視するように語りだす

「いやあ吸血鬼キティちゃんの600年に渡る冒険を描いたものなんです、僕が特に好きなのは魔法使いの男に罠にかけられて呪いを・・・「チャッキ」・・・・・・・・」

うんちよつと首に刺さってる・・・血が！血が！俺は君と違って不死じゃないんだから！無駄な流血事件を起こさないで！！

「貴様あゝ！！こつちの世界の人間だったのか！！あまつさえこんな侮辱するような事をして・・・敵だな！？絶対に敵だよな！！」

ちよつちよいちよい動かさないで、それ切れ味抜群だから！！

「まあ落ち着こうよキティちゃん」

「っ！！・・・貴様殺す！！」

流石に危ないので瞬歩で後ろに下がる・・・もちろん手は上にあげて降参の姿勢である。

「いや戦う気はないから・・・お願いをしに来たんだ」

「お願いだと？・・・ちつどうせジジイの使いだろ？言ってみろ」

「いやあのジジイは関係なしに」

うん俺をパシリにしたらすぐに殺すから

「ほうこの悪の魔法使いである『闇の福音』『不死の魔法使い』と言われたエウ、アンジェリン・え「アナスタシア・キティ」……だから何故貴様が私の本名を知っているんだ!？」

エヴァちゃんは駄々っ子のように俺に飛び乗り首を揺すってくる・
・いじりがいがあるなあ・

「H a h a h a」それはともかく」
「吐け!!」

「ここに住まわせてください!!」

「はっ?」

おお茶々丸ちゃんも驚いて硬直してるよ……珍しいな

「はっ?今なんと?」
「だから家に住まわせて」

「なんのつもりだ貴様！？馬鹿にしていると思ったら今度は住まわせてだど？ナメるなあーっ！！」
「がっ！？」

俺はフライングニーを喰らい崩れ落ちた、さらにエヴァちゃんは追撃してフットスタンプをしてくる・・・パンツまる見えだよ

「パンツまる見えだよ・・・あっ」

やべえ口が滑った・・・

「・・・殺す」

で現在に至る

まあ今はわりと落ち着いてるけどね・・・土下座しまくったけどさ

「で貴様は何者なんだ？」

「居候させてくれたら教え・・・」「リク・ラクラ・ラック・・・」
もちろんすぐに教えますとも！！」

やばい詠唱されるのは無理だから！！

・・・はあちよつとからかって逃げるつもりだったのに

「早く答える」

「はあ・・・ならキャッスルドランのカード返してくれる？」

「ああいいぞ・・・って違う！！」

おおエヴァちゃんもノリツツコミをマスターしていたか・・・さすがだな

「なんで貴様がキャッスルドランを知っている！？」

エヴァちゃんは驚愕、茶々丸ちゃんは分かってないや

「マスター、キャッスルドランとは？」

「ああ昔、アホに借りた便利な使い魔だ」

アホって・・・ひどいつー！

というか

「使い魔じゃなくて友人として貸してあげただけど・・・」

「ふん使い魔で十分だ・・・って、えっ？」

「いい子でしょ？折角貸したんだから優しくしてあげたよね？」

「・・・お前あの時のアホか？」

「アホってまた・・・借りといってそれはないでしょ」

「貴様だったのかーっ！！」

今度は後ろ回し蹴り・・・かなり効きますorz

「何故貴様生きている！？400年近く前だぞ！？何故人間の貴様が！？」

ちよっガクガク揺るなって

「いやあ色々あつて・・・」

「ちっ・・・にしても本当に貴様あのアホか？」

「アホってキティちゃん・・・」キティって呼ぶなっ!!」・・・
まあ信じられないなら変身しようか？」

「いやいい嘘をついているようには見えないからな・・・で本当に居候するつもりなのか？」

「ああお願いするよ」

若干嫌そうな顔をされたorz

「まあ借りがあるからな・・・それにしても貴様本当に何者なんだ？」

ふっそれにはこう答えよう

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

《続く》

8話：・・・まじすいません（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

すごい始まり方でしたねwww

やっとエヴァちゃんとの絡み
疲れました・・・まあ次回もちよつと続くけど

誤字脱字は報告お願いします

次回もお楽しみに？

9話：ちょっと行ってくるわ（前書き）

やっと原作2巻に入りました・・・早く修学旅行編に行きたいorz

誤字脱字は報告お願いします

9話：ちょっと行ってくるわ

結局あのあと蹴られ、袋にされ、解放された次の日の朝

詳しい事情は明日聞くとっておいたのでエヴァは孝明を探す

「孝明っっ！！孝明っ」

麗らかな朝にエヴァの孝明を呼ぶ声が響く

しかし孝明の姿はない

「ふむ、まだ寝ているのか？」

「マスター、先生からの伝言です」

茶々丸は孝明からの伝言だと言う折り畳まれた紙をエヴァに渡す。

紙に書かれていたのは・・・

『面白そうなものを発見したので遊んできます』

P.S・帰るのは三日後ぐらいです

愛しいキティちゃんへ』

コンビニに行く気軽さだった。

「にゃああー殺すっ！！」

朝には物騒な叫び声がログハウスに轟いた。

で俺がいるのは図書館島である。

自分の事に忙しくて、すっかりネギくんに絡むのを忘れ、図書館島事件を忘れるところだったのだ。

ちようどアルの部屋からエヴァちゃんの家に荷物を移すときにネギくん達を見つけ、尾行し図書館島に侵入

ネギくんたちとは違うルートで先回りをして、ジジイの待つ部屋に到着

「よおジジイ」

「・・・・・・・・」

ほおあくまで石像を通すのか・・・なら

「なんだジジイかと思ったら石像か・・・粉微塵にしても問題ないな」

「待つんじゃー!!」

「最初から素直に返事すりゃあいんだよ」

「・・・何をしにきたのかのうこんな所に？」

「ネギくんたちがここにくるだろ？俺も混ぜろ」

「ぐっ・・・しかしのう」

石像はたじろぐように引く

「大丈夫だ、地底図書室でしか手をださないから」

「いや手を出されるのが困るというか・・・のう」

狸ジジイめ・・・そんなに俺をネギくんに近寄せたくないのか

「分かった手を出さずに見守るだけにするから安心しろ」

「本当なのじゃな？」

「俺はシヨウは特等席で見たいんだ」

「シヨウって・・・はあ仕方がないかのう。ただし手は出さんでくれよ」

「ああ喧嘩吹っかけたりバトルはしないと誓おう」

「ならネギくんたちを頼むのじゃ」

「了解」

俺はいつぞやの変身不審者さんセットを装着し、地底図書室に舞い降りる

アルがいそいそと色々用意をしていたので普通に無視する

「手伝ってくださいよ」

「断る」

アルが手伝いをするよう言ってくるが断固拒否だ！・・・勝手に人の過去を見やがって

というかあいつ途中で見るの止めたからね！

俺が自殺しようとするぐらいで止めたからね

なんかあまりにも不快なのでこれで読むの止めますとか言われました

酷くね？

まあアルを無視して、ネギくんたちを待つ間釣りを楽しんでいると・

・・獲物が降ってきた。

振り返るとすでにアルの姿はなく、狐の面をして黒いロングコートを纏い、無地のプラカードを付けた俺だけがその場にいる。

まあ楽しませてもらおうかな

ザッパーン

湖に七つの黒い影が墜落したw

どうやら堕ちた際の衝撃で気絶したらしく、なかなか浮かんでこないで、しょうがなく陸地にあげておく。

いや訂正しよう一人だけ起きていやがった・・・馬鹿忍者め!!

「何者でござるか？」

長瀬は手を後ろに回してながら俺に質問してくる・・・多分手裏剣とかクナイを持ってるな

俺はプラカードを指差す、するとそこには・・・

『怪しいものではない。図書館島を管理しているものだ』

という文字が浮かび上がる・・・声で答えると正体がバレそうなので、エヴァちゃんの家からパクっ・・・借りてきた思ったことを表

記するプラカードである。

元々は喋れない障害者用である

「ふむ、外見から怪しさを満点なのでござるよ」

長瀬がそんなことをほざく

『君達を見守るようぬらりひょんから頼まれてね』

「ふむ学園長の知り合いでござったか・・・なら信じてみるでござる」

そう言つて長瀬は寝たフリを始める・・・面倒なやつめ

というかぬらりひょんで生徒に通じたぞジジイ

ジジイをけなしているとネギくと明日菜ちゃんが起き上がり、他のやつも起きはじめる。

周りの風景を見て、驚愕し何か言い合っていた・・・俺の存在感は

空気の如し

長瀬が哀れみの目を向けてくる・・・止める慰めるな！

俺は高い本棚の上で犬の様な座り方をしてネギくんたちを見下しているのだが・・・本当に気づかれてねえや

あれ？なんか視界が霞んでくる・・・どうしてだろう？

「み 皆さん元氣を出してくださいっ

根拠はないけどきつとすぐ帰れますよっ

あきらめないで期末に向けて勉強しておきましょうっ

「「「「え・・・べ・・・勉強~~~~!？」「「「「

ネギくんの提案にバカレンジャーは慌てふためく

長瀬は引き攣った笑みを浮かべている・・・ざまあ

で茶番が続いてる・・・いまだ誰も俺に気づかず

本当帰ろつかなく悲しくなってきた・・・

哀愁を漂わせていると・・・

「」「食料探したっー」「」

「あ・・・」

待つてください僕も・・・」

完全に俺を無視するスタイルらしい・・・帰ろう

エヴァちゃんをからかって遊ぼう・・・

などと不埒なことを考えていると

「待つでござる」

「どうしたアルか楓？」

古菲が何の不思議もなさそうに言う

「皆本当に気づいていなかったでござるか・・・」

また長瀬が哀れみの目を向けてきた・・・やめて泣いちゃうから

「なっ！？誰アルかあいつは！？気配がなかったアル」

ようやく気づいたし、気配とかの問題じゃねえよ！！

「あんた誰よ！？」

『怪しいものじゃない』

「「「「格好が不審者丸だし（です）（アルよ）（だよ）（や）
なのよ」「」「」」

めちやくちゃ突っ込まれた

「というか喋りなさいよ！！」

『すまない声は昔事故で・・・』

呼吸するように嘘をつく!!

「あっ・・・」

少し落ち込む明日菜ちゃん

『気にすることはない。知らなかったのだからな』

「・・・」

俯くなよ全く人が柄にもなく励ましたのに

「で結局あなたは誰なんですか？」

さすが夕映ちゃん大事なところを忘れないね

『図書館島を管理しているものだ』

「なっ！？ならあなたが幻の大司書なのですか！？」

それはあの陰湿変態野郎だよ
一緒にするな

『いや私は警備など迷子になった子などを助けている。大司書とはまた別の存在だ』

「・・・そうなのですか」

なんで若干落ち込んでんだよ！！

あいつに会ってもいいことないからっ！！

「じゃあ出口まで連れて行ってくれるんですか！？」

とネギくん

偉いなあさすが教師

『いや学園長に報告したところ、ここで特別補習を行うことを許可するとのことだ』

「「「「「なっ！？」「」「」」

慌てるバカレンジャー

『みつちりしごくといい（ー）』

「なんか最後の顔文字が腹立つでござるよ」

五月蠅いバカブルー

『全教科のテキストにトイレにキッチンに食材もある・・・大いに頑張るといい（・・）』

「本当に腹立つアル」

H a h a h a

『ちなみに風呂はないので水浴びで我慢してくれ、シャンプーとボディーソープだけは一応用意してある』

「なんか至れり尽くせりすぎない?」

「確かに少し怪しい気にはするです」

『あと魔法の本は諦めたまえ』

「なっ！？」

「どうしてですか!？」

こちらを睨みつけてくる夕映ちゃん

『ズルしてはよくないかと思わなかったのかな？』

「ぐっ……それは」

悶える明日菜ちゃん
真面目に勉強しなさい

『ちなみに魔法の本は私が持っていたりするが、取れるとは思わないことだ』

まあ嘘だけど
ただからかいただけである。

「むつ 私たちをナメてるアルね？ 私たちは強いアルよ」

「ニンニン、拙者と古が二人がかりなら行けそうもでござるが？」

『止めとけ』

そういつて（書いて）二人に本気の殺気を放つ

古菲は後ろに飛びさがり、長瀬はクナイを構えるというか投げてきた・・・ちよっお前

しょうがなく手で掴み、長瀬の足元に投げ返した。

「・・・・・・・・」

『実力の差を理解したかな？』

訳の分かっているネギくんたちはただ首を傾げている。

「ふむ・・・勝てそうにないでござるな」
「あいや、まじで殺されると思ったアルよ」

『分かってくれたのならいい』

俺が引っ込もうとすると・・・

「待ってください」

夕映ちゃんが止めてきた・・・うにゃ何の用かな？

「長瀬さんと古さんが勝てないと言わしめる強さを持った貴方が守っているのならば・・・その本は本物ということですか？」

うむさすがだぜ、ゆえ吉いいとこついてくる

『ふむ、それは分からない私はただ守れと言われたただだからな・・・しかし綾瀬夕映、この世には不思議で楽しくて面白いことが沢山ある』

「・・・・・・・・」

夕映ちゃんは無言でこちらを真剣に見つめてくる。

『なら私は信じよう・・・魔法の本という存在を』

「そうですか・・・」

夕映ちゃんは考え込むように俯き物々と何かを言っている・・・少々怖いな

『ほら早く勉強したまえバカレンジャーの諸君（笑）』

「「「「まじでムカつく（アル）（でーびる）（よ）のよー！」「」」」」

うん元気だな

そう言ったあとネギくんたちは授業を始めた
俺はその間ずっと読書をしていた・・・横にこのかちゃんがつつと
いるのがとてもなく気になるが

しょうがなく話し掛けることにした。

『何の用かな?』

「どっかでおうたことない?」

『気のせいだろう』

読書に戻ろうとするとずっとこちらを見つめてくる・・・バレてない
よね!?

「どっかでおうた気がするんやけどな」

『君も勉強してきたまえ』

そう言ってこのかちゃんを追い払う・・・バレたら笑えなくなるかな
らな

そして次の日まで監視を続けていると（もちろん水浴びの際は残っているメンバーの近くにいた・・・怪しまれたら嫌だし、このメンバーなら殺されかねんし）ゴーレムが現れ、佐々木を襲撃していた。

もちろん俺は無視、無視した方が面白いから・・・「助けなさいよバカ狐！！」とかバカレツドが言っているが軽く無視、そして魔法の本がゴーレムの首に引っ掛かっているのに気づき佐々木を助けつつ、奪取していた。

やるなあゝ

「何が魔法の本は自分が持つてるよ！！嘘つき狐めっ！！」などとゴーレムから逃げながらも明日菜ちゃんが責めてくるが

俺は横を向き口笛を吹きスルー

「本当に腹立つです」

と夕映ちゃん

『あつちなみに滝の裏が出口だから気をつけて帰りなさい』

一応帰り道を教えとく

「ちよつタカ・・・「カツ」・・・痛っ!!」

ジジイに向かって小石を投げ、額に当てる・・・本名言つな馬鹿っ
!!

『私の名前は狐だ』

「・・・・・・・・」

ジジイがジト目で見てきた気がするが石像なのでよく分からなかった・・・まあ関係ないけど

で俺は十分楽しんだので、地上に帰ることにする。

ちなみに授業はアルからパクっ・・・借りた式紙を使って代わりに授業をさせていたので、なんら問題ない・・・たまにエヴァちゃんが式紙を消そうと攻撃してきたけど

そしてバカレンジャーとは違うルートで駆け上がり、地上へ

なんとなくエヴァちゃんの家に行くのが怖かったので、とりあえず
今日だけは女子寮に帰った・・・次の日テストに遅刻し、テストの
試験官をサボるはめになり新田先生に説教を喰らったorz

《続く》

9話：ちょっと行ってくるわ（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

仮面ライダーなのに变身してない今日この頃
てへっ

ぶっちゃけるともう2巻で主人公活躍出来そうな話なくね！？

3巻に移って大丈夫だよね！？

ということで次回はエヴァちゃん襲撃編に以降する予定です・・・
予定は未定とも言いますので断言はしませんけど

次回もお楽しみに？

10話：地獄に堕ちる（前書き）

先に言っておきましょう・・・

今回はエヴァちゃんじゃありませんっ！！

オリジナルストーリーです

ではお楽しみ下さい

誤字脱字は報告お願いします

10話：地獄に堕ちる

どうもみんなのアイドル孝明です

コウメイではありませんタカアキです

今現在していることはお使いです・・・もちろん見張り（茶々丸ちゃん）ありの

後ろで銃を構えられた人質の気分がよく分かりました・・・しかも非殺傷設定になってないのが酷いよね

確かに説明しないでネギくん遊びに言っちゃったのは悪いと思ってるけどさ・・・これは酷いよね？

ちなみに今の格好教えてあげようか？

エヴァちゃんの大好きなフリフリドレスに化粧をされ、ウィッグまでつけられて背中には「私は愚か者です」って書いてある紙が貼つてあるんだ

ちなみに紙を剥がそうとすると後ろから弾を込めたような音がするから怖いよね

ああ女装とか初めてさせられたよ・・・死にてえ

しかもヒールだよ？

口紅も付けられてるし・・・本当に死にたい

しかも写真撮られたし・・・あとナンパもされた

ナンパしてきたやつは全員股間を蹴り抜いた・・・鳥肌立ちまくりだよ

シクシク・・・俺こんなキャラじゃないのに

「落ち込まないでください先生、似合っています」

「・・・アリガトウ」

変な慰めはいりません
逆にへこみます

というかすでにボコボコです

ああもう学校・・・灰に変えようかな

物騒なことを考えていると・・・

「止めてくださいっ!!」

なんか聞き覚えのある声が聞こえたので、行ってみると

アホっばい男と腕をアホっばい男2に捕まれた和泉と、引き離そう
としている大河内と明石、オロオロしている佐々木がいた・・・お
いお前らわざとだろ

わざとこのタイミングで絡まれたろう

ふざけんなこつちとら女装してんだぞ？

助けられないから！！

「だから〜ちよつと遊ぼうって言ってるだけじゃん？」

と和泉を掴んでいる馬鹿A

「そつだよ〜」

と同調する馬鹿B

「だから嫌だつて言ってるじゃないですか！！」

そつ言つて和泉の手を離させようとする大河内

「亜子を離しなさいよ！！」
と詰め寄る明石

やめる刺激すんなよ！！

「うるせえんだよ！！」

そう言つて馬鹿Bが大河内の頬を叩こうとするが・・・

明石が庇い明石が叩かれ、地面に尻餅をついた・・・よしっ

「茶々丸ちゃん」

「はい・・・なんでしよう」

「拳銃ある？」

「はいどうぞ」

そう言つて渡されたのはデザートイーグルだった・・・熊でも倒せるやつ

もしかしたら茶々丸ちゃんも怒ってるのかもなあと呑気に考えながらもぶち切れている俺

弾がゴム弾なのが残念だが・・・躊躇わず和泉の腕を掴んでいる馬鹿Aの股間に発砲した。

「げふっ!？」

馬鹿Aが泡を吹きながら倒れる

その隙に馬鹿Aの腕を和泉から離させ、馬鹿Aを近くにあつた噴水にぶん投げる。

馬鹿Bはこちらを呆然と見ているので微笑みかける・・・お前はこの程度じゃ終わらないよ？

馬鹿Bは逃げようとするが・・・

「茶々丸ちゃん!!」

「了解しました」

茶々丸に組み伏せさせる

俺は馬鹿Bの顔面をヒールで踏み付け、顔面スレスレの所を狙ってデザートイーグルを発砲し続ける。

ドンッドンッドンッドンッ・・・

「ひいっ!!」

男が気絶しようとするが踏み付け、気呼び覚ます・・・簡単に死

ねると思つなよ？

俺の生徒に手を出したんだからな

俺は後ろに立ち今度は馬鹿Bの肛門と股間に向けて発砲する

「ぎゃぴーっ!？」

馬鹿Bが奇声をあげて、完全に気を失ったので噴水に向かってぶん投げた・・・くたばれ

167

「茶々丸ちゃん」

「はい、すでに警備員に連絡しておきました」

うむ完璧

あとは・・・

「大丈夫だったか、明石？」

「えっ！？はい！！ありがとうございます・・・って？あれ？」

いまだに地面に座り続けている明石に話し掛け、手を差し出したのだが反応がおかしい・・・何故だ？

大河内に和泉に佐々木も不思議な顔をしている・・・何故だ？

後ろを振り向くと茶々丸ちゃんがオロオロしていた・・・何故？

「どうしたの茶々丸ちゃん？」

「いえお伝えした方がいいのか迷いまして・・・」

「うゝん気になるから言つてよ」

「・・・はい、先生御自分がどのような格好をしているかお忘れですか？」

「えっ・・・」

ちよい待て・・・あれそうだ俺

最初・・・助ける気なかったのに・・・馬鹿が手をあげたから・・・

俺・・・女装してたんだーーーーっ!!

「にぎゃあああああああーーーーっ!!」

俺は奇声をあげ、茶々丸ちゃんの腕を掴み本気で走り出す。

失われた尊厳を取り戻せる遥かなる理想郷を求めて・・・

全力疾走で人気のない公園に着き、俺はorzみたいな格好で落ち込んでいる・・・茶々丸ちゃんはオロオロしまくりである。

死にたい・・・

死のう・・・

隠しもっていたナイフを抜き、喉にあてると茶々丸ちゃんが羽交い締めにしてくる。

「後生だから死なせて!! 生き恥をさらさないで!!」

「先生落ち着いてください取り乱しすぎです」

ナイフを取り上げられ再びorz形態に移行する俺

「俺の男としての尊厳を返して下さい・・・ぐすっ」

わりと本気で涙目だった。

「あっ・・・やっと追いついた」

後ろから聞きたくない声と息を荒げた呼吸が聞こえた・・・恐る恐る振り向くと、あの四人組がいた。

俺は隠しもっていた日本刀をだし、腹をかつさばこうとした・・・しかしまた茶々丸ちゃんに止められる。

「いやぁゝ死なせて!!お願いだから死なせて!!」
「落ち着いてください」

さらに俺の様子に気づき四人組も俺を止めに来た・・・あっ大河内に日本刀とられた。ああ最後の刃物が・・・

俺は地面に額を擦りつけるような格好で顔を両手で覆う・・・シクシク

「お礼を言いにきただけなのに・・・何故こんな状況に？」

最もな疑問だな大河内!!しかし俺の尊厳が!!

「とうかどうして私の名前を知っていたんですか？」

「・・・・・・・・」

うつ

「茶々丸さんの知り合いなんですよ？」

「ええマスターの客人で居候です」

茶々丸さん普通に答えないで！！バカピンクは油断できないから！！

なんか不意に勘が働くときがあるから！！

「へえ」でもなんか聞いた覚えのある声だったんだよねえ」

「見たことある気もしたんやけどなあ」

止めて俺の心をえぐらないで！！

「ともかく・・・助けてくれてありがとうございます」

そう言つて四人一緒に頭を下げてくる・・・うう

「はっお・・・私はただあの男がム力ついたからやっただけで」

「・・・やっぱり聞いたことある声やなあ」

「それにその台詞も聞いた覚えが・・・」

ミスった!!

君達わざとでしょ!?!わざとやってるんでしょ!?!?

滝のような冷や汗を流していると・・・

「そろそろ帰りましょう」

茶々丸ちゃんが助け船を出してくれた・・・ありがとう愛してる愛してるよ茶々丸ちゃん!!

茶々丸ちゃんは玉葱小僧なんかにはやらないよ!!

「うん・・・帰ゆ・・・」

トボトボと迷子のように茶々丸ちゃんの手を掴み、その場から逃げようとする。

「林原先生・・・大丈夫です。美人になってますから」

「「「えっ!?!」」」

ボケロボが!!

「林原先生って・・・」

「嘘!?!」

「本当に!?!」

俺は土下座のようなポジションになるが・・・これは土下座のためじゃない!!

俺は自分の頭を振り上げ地面に叩き付ける。

「死ね、死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねえーっ!!」

狂ったように頭を地面に打ち据え続ける

「割れる！！割れる割れる割れる割れる割れる割れる割れる
ー！！」

そして再び全員に止められ、orz 形態に・・・

「にしても・・・どうしてそんな格好してはるんですか？」

「罰です」

茶々丸さん！？

「人の家にお世話になっているのに朝帰りをなされたので、マスタ
ーが・・・」

えっちょっ確かに曲解すればそんな感じになるけど・・・

「「「「「………。」」「」「」

ほら！勘違いされるだろうがっ！！

「違うんだっ！確かに朝に帰ってはきたが、ちゃんと仕事で……」

「行きたいと自ら望んで行ったのですよね？」

止めろっ！！

変な情報を与えるなっ！！

「「「「「やっぱり………」」「」「」

畜生っ！！

「あれ……ってことはエヴァちゃん家に泊まってるってこと？」

しまったーっ!!

「同棲!? 一つ屋根の下!？」

キヤーキヤー騒ぎ始めた四人組

だから嫌いなんだ女子中学生!!

「どうしてエヴァちゃん家に？」

「・・・お前ら俺に女子寮に住めと？」

「「「「はっ?」「」「」

「ジジイのやつ・・・俺の荷物を全部・・・俺に内緒で女子寮に」

「「「「ああ・・・」「」「」

やめろよ・・・あのジジイならやりそうみたいな顔するのは!!

「別に先生なら問題ない気がするけどな」

「うん大丈夫だと思う」

「そやね先生なら大丈夫や」

「先生ならOKだよ!!」

なんか勝手に了承している四人組・・・お前らがよくても俺にはあの環境は耐えられねえよorz

そしてイロイロ会話して、遊ぶことになり茶々丸ちゃんも一緒に遊んだ。

もちろん俺は女装させられたままorz

なんか佐々木と明石がやたらと腕にくっついてきてうざかった・・・普通なら嬉しいんだけど

理由がさ・・・女の人にしか見えないから大丈夫!!・・・だってよ

・・・死のう

そして再び弱みを握られ、また遊ぶ約束をしてから夜遅く帰宅すると・・・仁王立ちのエヴァにゃんが立っていた

すっかり忘れてたZE

うん死んだな

こうして俺は凍りづけにされながらも歳の離れたキャピキャピの友達を手に入れた。

《続く》

10話：地獄に堕ちる（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

女装が似合うことが発覚した孝明くん

完全に今回はいじられキャラwww

で友達ゲットww

それにしてもまだ活躍してないキャラが多すぎるorz

運動部四人組は作者が大好きなので活躍しまくりですね

まあそれはともかく次回こそエヴァちゃん襲撃編です

次回もお楽しみに？

ちなみに作者は暖かい感想をお待ちしていますwww

では？

11話：弄りがいがあるなあ（前書き）

11話目です

とりあえずエヴァちゃんと孝明くんのバトル的なものを

誤字脱字は報告お願いします

11話：弄りがいがあるなあ

「おい孝明」

「なんだいエヴァにゃん」

今日もキャピキャピとうるさい女子中学生の相手を終え、リビングでウダウダしているとエヴァちゃんが話しかけてきた。

「にゃん・・・まあいい。ちょっとついて来い」

そっいつて踵を返しどこかに行った・・・

ドンドンっ

「ついて来いって言うてるだろうがっ！！」

ついて行きませんでした・・・だって明らかに面倒くさそうな感じがするから

「早くっ!!」

しょうがなくついていくと地下の物置に連れていかれた・・・人形がいっぱいあるなあ

「さあここに立て」

そう言っ指差されたのは・・・例の別荘だった。
現実での一時間がこの中では一日になるというあれである。

すっげえ嫌な予感をするZE

「急に腹痛が・・・」

「ほう・・・なら腹をかつ捌いて・・・」

「さあ行こうかつ!!」

目がわりとまじだった！

しょうがなく別荘の前に立ち、中に入った・・・うおゝすげえーっ

!!

広いつ!!

少し感動していると・・・

「おい何を遊んでいるんだ」

「いやちよつと感動を・・・」

「ふっ」

エヴァちゃんは少し嬉しそうな顔をしている・・・そんなに自慢なんだ

「まあそれはともかく・・・さあ勝負だっ!!」

「嫌だっ!!」

「なっ!？」

即答だった

だつて面倒だし・・・

「貴様っ！馬鹿にしてるのか！？」

「嫌だつて可愛い女の子と戦うの嫌だし・・・」

「なっ！！馬鹿にするにゃーっ！！」

にやって・・・可愛いなおい

それより・・・もしかしてエヴァちゃん

「ねえエヴァにゃん」

「にゃんって言っとなっ！！」

「ふうエヴァちゃん」

やれやれ我が儘な子猫ちゃんだぜ

「馬鹿にして！！・・・まあいい。で、なんだ！？」

いちいち大声で言わなくても・・・まあいいや

「エヴァちゃんに呪いをかけたのって、ナギ・スプリングフィールドだよね？でナギを探したけど見つからないんだよね？」

「そうだ。私はあの馬鹿にテキトーな呪文で・・・今思い出してもムカつく！！・・・だけど見つからないんだ。死亡したことになつてるしな・・・」

「・・・ナギの仲間である紅き翼たちも探したの？」

「もちろんだっ！！」

そんな無い胸を張られても・・・

「全員？」

「ああジャック・ラカンにアルビレオ・イマ。ガトウ・カグラ・ウ〃オンテンバーグによく分からない奴・・・あと近衛詠春、奴はすぐ見つかったからな。・・・詠春は何もしらなかった。だからもう諦めてるんだ・・・」

よく分からない奴か・・・扱い酷いな

あと泣きそうな顔するな

「よく分からない奴って？」

「あぁなんか調べられなかったんだ・・・集まった情報姿形と名前が全部バラバラでな。全く分からないんだ」

あぁあんまり同じ仮面ライダーにはならないようにしたからなあ

ってことは俺が紅き翼だって知らないんだ・・・どうしようかな

まあいいや。バレるまで無視しよう

でもバラしても面白そうだしな・・・

悩んでいるとそれに気づいたエヴァちゃんが話し掛けてくる。

「でそれがどうかしたのか？」

「いんや別に」

とりあえずごまかした

「む・・・そうか」

「うん気にしないで」

どうしようかな

「さあやるぞっ！！」

「ええ」

「あれ？茶々丸ちゃんとチャチャゼロちゃんは？」

「ん？二人が必要な程貴様は強いのか？」

挑発してきたよこの娘・・・まあ乗ってあげようかな

なんか楽しそうだし

やっぱり正体明かそう・・・どんなリアクションするかなあ

「うん二人がいても負ける気はしないけど？」

「・・・貴様。いいだろうあとで後悔しても知らんぞ」

そう言つてエヴァちゃんはチャチャゼロちゃんと茶々丸ちゃんを呼び寄せる

「何の御用でしょうかマスター？」

「先生の相手をしてやれ」

エヴァちゃんは傲慢に言い放つ・・・ナメられてるなあ
まあ虐めてあげましようかね？

「ケケケツククニ暴レラレルミタイダナ」

「お手柔らかに」

軽く手を振りながら言う

「はっボコボコにしてやれっ！！」

軽く手を振りながら言う

「はっボコボコにしてやれっ!!」

エヴァちゃんの掛け声とともに襲い掛かってくる二人・・・ちよっ
まだ準備が!!

とりあえず無音拳を二人に放つ

二人に直撃し、二人は一端向かってくるのを止めた

「ケツケツケツヤルナ」

チャチャゼロちゃんは嬉しそうな声をあげエヴァちゃんは訝し気な
目をむけてくる

「むっそれはタカミチの技じゃないか？」

「いや実際はガトウの技だから」

「はっ?なんで貴様がそれを知っているんだ？」

おお好感触な反応!! やつときたよ

「それはね・・・」

そう言いつつディケイドライバーを装着し、ライドブッカーからカードを出してディケイドライバーに挿入

『カメンライド・・・』

「俺が紅き翼の一人だからだよ・・・変身っ!!」

サイドバツクルをスライドさせる。

『ディケイドっ!!』

「なっ!?!」

サイドバツクルをスライドさせる。

『ディケイドっ!!』

「「なっ！？」」

姿が変わったことと俺のカミングアウトに驚愕するエヴァちゃんと茶々丸ちゃん・・・チャチャゼロちゃんはどうでもよさ気だった。

「なっ嘘をつけ！？確かに似た格好はしているが・・・」

「じゃあ証拠を見せてあげよう」

ライドブッカードからカードを取り出し挿入、サイドバックルをスライドして

『カメンライド・・・カブトっ！！』

カブト虫がモデルの赤と銀がモチーフで青い眼をした仮面ライダーであるカブトに変身をする。

「なっ・・・さらに姿が変わるだっ！？」

「俺が紅き翼である証拠にね・・・」

さらにライドブッカーからカードを取り出してディケイドライダーに挿入、バツクルをスライドしてカードを使う。

『アタックライド・・・clock up!』

他人に認知されない程超スピードで動けるようになった俺は茶々丸ちゃんとチャチャゼロちゃんの横を通り抜け、エヴァちゃんを寝かせてマウントポジションをとる。

『clock over』

超スピードが解け、周りに知覚される状態となる。

「ほらこんなに簡単にマウントポジションがとれる」

「なっ!?!いつの間に!?!」

俺はエヴァちゃんからどいて、手を差し出す。

「納得してくれたかな？」

「貴様が紅き翼だということはわかった・・・ならナギがどこにいるか知らないか!？」

「知らない」

戦いとかどうでもよくなっちゃったみたいだね

ムキになって突っ込んでくると思ったのに・・・
せっかくハイパーフォームのカード用意してたのになあ・・・

まあようやく紅き翼の一人を見つけられたんだから、それもそうか・
・

「本当か!？本当に知らないのか!？」

「知らないよ」

諦めてんじゃないのかよ・・・

まあ好きなやつを諦めきれ程、エヴァちゃんはネジ曲がってない
ってことかな

「くっ・・・ようやく見つけたのに・・・」

エヴァちゃんは俯きすごく悲しそうな顔をしていた・・・やめてくれよそんな顔をするの

「一つだけ情報があるにはあるよ」

「なんだ！？教えてくれ!？」

うわっ急に元気になったよ・・・というか首を揺するのをやめて

「ネギくんがナギについての情報を持っているよ」

「そうか！あのガキが・・・なら問題はない。すぐにでも聞き出してやる」

エヴァちゃんは嬉しそうな顔をして笑っていた・・・やっぱり教えておこう

「ごめんエヴァちゃん」

「ん？なんだ？」

「やっぱり今教えてあげるよ・・・ネギくんが知っていることを」

「なに！？貴様知っているのか！？」

「うん」

「教えろ！！」

だから揺するな怒鳴るなって・・・全く

「ナギ・スプリングフィールドは生きているよ」

「えっ・・・」

「ネギくんが6年前に会って本人から杖を貰っているからね」

「本当か？・・・本当にやつは？」

「生きている」

「そうか・・・そうなのか!!」

エヴァちゃんが嬉しさのあまり小躍りを始めたので、思わず携帯で録画・・・あとでプロジェクトで流そう。

「おい孝明っ!!今から飲むぞ!お前も付き合え!」

「ケケケツ・・・イイナ御主人オレモ付き合ウぜ」

「まあなら御相伴に預かりましょうかね・・・いや楽しそうだ」

その後飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎは三日程続きヤバいことになっていた・・・頭痛が半端ない

その際にチャチャゼロちゃんと仲良くなり、色々語り合い

エヴァちゃんとも仲良くなり、今度玉葱小僧を襲うから手伝えと言われたので

少しだけ協力すると伝えた・・・まあからかいがあるしね

楽しみだなあ弄るの

そう思い別荘で爆睡する・・・すでに四日目

現実世界では4時間が経過している・・・あっ課題つくるの忘れた。

・・・まあいいや

そして俺とエヴァちゃんの協力による玉葱小僧襲撃作戦は進められた。

《続く》

11話：弄りがいがあるなあ（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

なんかバトルは全然なかったですorz

いやラカン直伝の技で遊ぶか迷ったんですが

やめときました・・・なんかエヴァちゃんが怖かったんでwww

でようやく次回は玉葱小僧をいじる回です

どうやって弄るかはまだ考え中です

次回もお楽しみに？

12話：狐仮面登場っ！！（前書き）

12話です

ようやく3巻に突入

疲れたorz

誤字脱字は報告お願いします

ああム力つく・・・いじけて窓の外を見てみると、ネギくんが何やら新年度の挨拶をしている。

「「「「はい

よろしく・・・（ハート）「「「「

うんやっぱりこのクラス腹立つ

千雨ちゃんが同情するような目をむけてくるっ！！

やめて！！さらに傷つくからっ！

千雨ちゃんの目に怯えているとすずな先生が教室を訪ねてきた。

「ネギ先生

今日は身体測定ですよ

3-Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

ああこれは・・・すぐに行動に移す。

「あ、そうでした

ここですか!?

わかりましたしずな先生」

ネギくん慌てすぎ

「で、では皆さん身体測定ですので・・・

えと あのっ今すぐ脱いで準備してください」

静まり帰る教室

「ハッ・・・」

「「「ネギ先生のエッチ~~~~ッ（ハート）」」」

「うわ~~~~ん

まちがえました！

林原先生も早く出ま・・・あれ？」

すでに俺は外にいるのさっ！！

エアリーディング1級だからな！

さらに

「あれ？先生　そこにメモが貼ってありますよ」

「あつ本当ですね・・・何々

『嫌な空気なので外にいます。

それにしてもさすが紳士・・・変態紳士ですね

・・・イギリスでもこういう感じなのでしょうか？

b y 林原』

違いますよ！！うわ~~~~ん！！」

飛び出してくるネギくん・・・ああ楽しいな

外でネギくと待っていると中からかなりうるさいキャピキャピした声が聞こえる。

今ちょうど柿崎がみんなに桜通りの吸血鬼の話をしている・・・そうかエヴァちゃんはチュパブラだったのか

・・・量産が可能か聞いてみよう。

一人思考に耽っていると、和泉が全力でこちらに駆けってくる・・・あつやべえ

「先生・・・」

大変や・・・

まき絵が・・・まき絵が・・・」

という和泉の声で身体測定中だから下着姿の生徒たちが、扉やら窓を開けて

「「「「「何!？」

まき絵がどーしたの!？」「「「「「

下着姿のまま出てくるなっ!!馬鹿!

「わあ~~~~!？」

「っ!?!自分達の格好を考えろ!!」

思わず怒鳴る・・・すると自分達の姿に気づき何故か俺にだけ物を投げてくる!

やめる明日菜ちゃん!!

教壇は投げるものじゃないからっ!!

千雨ちゃんも椅子投げないで!!

「理不尽だっ！！」

とりあえず逃走・・・もう今日は授業なんか出ないもん

わりといじけモードである。

そして時間が経ち放課後

今現在のどかちゃんをストーキング中

もちろん狐面に黒いロングコートの不審者セットである・・・しかし今回は改良点があるのだ！！

声が出せるように仮面に変声機を着けたのだ！！

これで私も福　潤ボイス!!

ふざけているとすでにエヴァちゃんかのどかちゃんに襲い掛かっている。

「キャアアアッ」

「待てーっ」

「!!--」

ネギくんが着たのに気づき一端下がるエヴァちゃん……のどかちゃん気絶しちゃったよ

「ぼ……僕の生徒に　何をするんですかーっ」

杖に乗って飛んでくるネギくん

……一般人に見られたら一発でアウトじゃねえか

『ラス・テル・マ・スキル……風の精霊11人
縛鎖となりて

敵を捕まえる』

エヴァちゃんを捕まえるために魔法を使うネギくん

『魔法の射手・戒めの風矢!!』

「もう気づいたか『氷楯・・・』」

エヴァちゃんも魔法を使いネギくんの魔法を無効化する。

魔法と魔法がぶつかって起きた衝撃でエヴァの被っていた帽子がとれ、襲撃者の正体に気づくネギくん

なんかグダグダと喋ってるけどそんな場合じゃない!!・・・どのタイミングで手を出すか迷うな。

そんなことを迷っている間に明日菜ちゃんとこのかちゃんが登場

あっ・・・ネギくんが逃げたエヴァちゃんを追って行っちゃった。

とりあえず明日菜ちゃんとかこのかちゃんの前に現れる。

「やあ」

「「うわあ!?!」」

めちゃくちゃ驚かれた・・・ふむなかなか面白いな

「あ・・・あなた・・・馬鹿狐じゃない!!」

「馬鹿狐とは失礼な。狐仮面と呼んでくれたまえ!」

言いつつカッコイイポーズをとる・・・荒ぶる鷹のポーズ

「あんた喋れないんじゃないの!?!」

「かつこいい声やな」

うん普通にスルーされた・・・かつこいいのは当たり前だよこのかちゃん

なにせ福 潤ボイスだからな!!

「喋れるように手術したんだよ」

嘘だけど

「へえ……って違うネギが変なやつを追いかけて行っちゃったの！」

「あつこれ宮崎のどこにかけてあげたまえ」

明日菜ちゃんの台詞を無視してこのかちゃんに持っていた毛布を渡す。

「あつ……ありがとうな」

「って無視するなーっ!!」

五月蠅いな全く

「五月蠅いぞ神楽坂 明日菜。心配なら君もついてきたまえ」

そう言って明日菜ちゃんの首襟を掴んで引っ張って行く。

「えっ・・・ちよっ普通に歩くから」

暴れる明日菜ちゃんを無視してネギくんの元へと走る。

俺たちがエヴァちゃんたちが屋上にいる建物の前に立つと

すでにネギくんの固有スキルでベビードール姿にされたエヴァちゃんと茶々丸ちゃんがいた・・・むう少し遅かったか

茶々丸ちゃんに羽交い締めになれ、ネギくんがエヴァちゃんに血を吸われようとしている・・・うむミイラなネギくんも面白そうだ

「ってちよつとネギがヤバそうじゃない！！なんとかしなさいよ！！」

「ええゝ面倒なんだけど・・・ミイラなネギくんもなかなかいいと思わないかね？」

「いいわけないでしょうが!」

・・・はあ、しょうがないか

俺は明日菜ちゃんの手を掴んで方向を定める・・・この角度かな

「ちよつとなんで手を・・・つてええゝゝゝ!?!? 覚えてなさいよー
っ!」

そのまま俺を中心に回転して明日菜ちゃんを遠心力でぶん投げる。

明日菜ちゃんはその勢いのままエヴァちゃんと茶々丸ちゃんを蹴り飛ばす。

エヴァちゃんの飛び方面白ｗｗｗｗ

あぶぶぶーっだつて!!
ぶっ笑える

明日菜ちゃんは自分が蹴った相手がエヴァちゃんと茶々丸ちゃん、自分のクラスメイトだと気づき、エヴァちゃんに詰め寄っている。

エヴァちゃんは蹴られた痛みで涙目になりながら、頬をおさえて退却している・・・覚えておけよとか三流の悪役www

でネギくんが血を吸われた恐怖で明日菜ちゃんに泣きついていてる。

やれやれ大丈夫かね？

あんまり虐めすぎて泣かれるのも嫌だな

どうしようかね

とりあえずエヴァちゃんの家に帰ると・・・何故か怒っていらっしやるエヴァちゃんがいた。

「どうして助けに来なかったんだ!？」

「いやちよつと頭痛が・・・」

「ふざけるなーっ!!」

駄々っ子のように俺の首を揺さぶるエヴァちゃん

「はぁ・・・はぁ・・・それはともかく・・・厄介だな神楽坂
日菜。まさか障壁を貫通されるとは・・・」
明

なんか悩んでいるエヴァちゃん
まあ魔法無効化能力なんてレアすぎて気づかないよね

「で貴様はいつ出てくるんだ？」

「いや最後にからかう程度で出ようかと・・・」

「むっ・・・あんまり手伝う気はないみたいだな」

「そりゃそうだよ。こっちら雇われている身だからね、下手なこととは出来ないさ」

「はっよく言う英雄様にはそんなの関係ないだろう？」

ちよつと皮肉げな笑みを浮かべながら言ってくるエヴァちゃん・・・
捻くれて育っちゃって

お母さん悲しいっ！！

「まあ正直関係ないんだけどさ・・・あの子がどこまで頑張れるかが知りたくてさ」

「ふんっ」

拗ねるなよ

「マスター、拗ねると先生が困りますよ。手伝って欲しいなら欲しいとそう言えばよろしいのに」

「拗ねてなどいないわっ！！別に手伝って欲しくもないわ！！余計なことを言うなボケロボっ！！」

巻いてやる巻いてやるなどとコントじみたことをしているエヴァちゃんと茶々丸ちゃん

ああこういうのがちょっとした幸せか・・・やっぱりここは優しい世界だなあ

・・・なのに暗い部分を表に出すのはかなり不快だ

可愛い女の子たちは笑っているのが一番いい

例え俺に憎しみを向けられてもいいから・・・笑っていて欲しいな

まあがんばりますかね？

《続く》

12話：狐仮面登場っ！！（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

今主人公の魔法の始動キーを考えているんですが・・・なかなか浮かびません

何かありますか？

ちなみに作者は全く浮かびません

では次回もお楽しみに？

13話：暖かくなると変態が増えるというがわりと世の中四六時中変態だらけで

13話です

遅くなつてすみません

誤字脱字は報告お願いします

13話：暖かくなると変態が増えるというがわりと世の中四六時中変態だらけで

朝健やかな気持ちで教員室で缶コーヒーを飲み、優雅な朝を過ごしていたら脇役教師Aもとい瀬流彦先生に学園長が呼んでいると言われ、洪々学園長室に向かった。

なんか悪いことしたかなあと微妙に教員室に呼ばれる中高校生のようなことを考えながら、一応学園長室の扉をノックして入る

敢えて許可は聞かない

「ノックした意味あるのかのう？」

「さあな」

ぞんざいな口調と態度でジジイに何のようで呼び出したかを聞こうとすると、この場に居てはおかしい人物がいることに気づく

「なんでここにいるんだ長谷川？」

「・・・・・・・・・・」

千雨ちゃんは片手で目元を抑えるように俯いている

ふむ

「とうとう犯罪を犯したか・・・主に露出」

「しねえよっ！！アンタの中での私はどんな存在だよ？！」

「なんか人の少ない公園とかで年端もいかない少年少女相手にハアハア言いながらコスプレについて語ってる感じ」

「なわけあるかっ！！」

うんナイスツッコミ絶好調じゃないか

「長谷川。ジジイとタカミチがいるのに口調が素の状態になってる

ぞ」

「あっ・・・元々言えば全部アンタのせいだろうが！！くそっ！！
なんでこんなことに・・・なんなんだよあれは！？」

ジタバダしている千雨ちゃんを無視してジジイに問い掛ける。

「なんで俺が呼び出されたんだ、ジジイ？」

ジジイは少し面倒くさそうそうな顔をして、話始めた。

「昨夜警備の魔法先生と西と思わしき術者の使役する鬼との交戦中
を目撃してしまった女子生徒がおつてな」

「なるほど」

「人払いの結界を張って魔法の存在を知るものしか入れないように
したんじゃないの・・・で夜も遅かったので一旦護衛をつけて家に
帰して、今朝呼び出したというわけじゃ」

「・・・・・・・・」

運悪いな千雨ちゃん。全く巻き込まれないよう気をつけてねって言ったのに

というか夜中で歩くなよ

「でどうするんだジジイ？というか俺を呼ぶ必要があつたのか？」

「長谷川君曰く、林原先生に魔法の存在を教えられたから林原先生を呼べと言われたじゃ」

「・・・・・・・・・・。」

無言で千雨ちゃんを見つめる。

「くっ・・・・・・・・しょうがないだろうが！！あんなことがあつたんだから！！」

まあ怖かっただろうしな

微妙に目を逸らしながら責任から逃げようとする千雨ちゃんの頭を撫でて大人しくさせる。

「まあいいよ。長谷川が巻き込まれるのは目に見えてたし」

「はあ!?!」

俺の言葉に驚愕し俺の手を弾いて立ち上がり、どういふことかと言えと言外に訴える。

「長谷川にいるクラスは元々特殊な人間が多いクラスでな。いつか魔法の存在を知りそうな奴らが集められているんだ・・・まあ今ではネギくんの仮契約パートナーの養殖場ってとこかな」

「なっ・・・なんだよそれ!?!私の平穏な人生を返せ!」

詰め寄ってくる千雨ちゃんを宥めながらも、軽くスルーしていると

「養殖場って身も蓋も無いことを言わないでくださいよ孝明さん」

「いやだってそのつもりなんでしょ、そこの異常な頭をした爺さんは？」

「フオツフオツ」

ジジイは笑いながら俺の言葉を見無視しているが、間違いなく最初からそのつもりだったのが目に見えている。

狸ジジイめ

「俺としてはガキどもを巻き込むのはわりと気に入らねえんだけどな」

「むっ・・・それは」

ジジイは冷や汗をかきながら目を逸らしている。

すると急に何かを思いついたらしく笑みを浮かべている・・・ム力つく面だな。

「フオツフオツ・・・ならどうして長谷川君に魔法の存在を教えたのかな？」

「ああ！？そんな簡単なことだ。俺の周りで笑顔じゃないやつがいるのは許されないことだからだ！

どんなことであれ笑ってないやつがいたら、その原因を完膚なきまで微塵の躊躇もなく粉碎する。

今回長谷川の笑えない理由は他者が不思議なことに違和感を持たず、自分のみが他者と隔絶している。そう感じるのが原因だった」

「・・・・・・・・」

三者は全員それぞれの対応で無言を通してしている。

ジジイは真剣に

千雨ちゃんはどこか嫌そうに

タカミチは苦笑しながら

「だから魔法の存在を教えて長谷川の笑えない理由を取り除いたまでのことだ。

それに長谷川に対して認識阻害の結界がちゃんと作用していなかったことも問題だとは思わないか、学園長先生？」

ニヤニヤといやらしくジジィに攻め寄る。

「ぐっ……しかし彼女が危険に巻き込まれでもしたら……」

「馬鹿め、長谷川には脅迫するネタを手に……。安全を守るためちやんと優秀な式紙を24時間休みなしで、ストーキングもとい監視させている。強さはそこらへんの魔法先生の2倍！完璧だろう？」

「どこがだよっ！？私のプライバシーはどうした!？」

そう言って俺の肩を掴みガクガクと揺さぶってくる千雨ちゃん

人生うまくいかないものなのだよ（笑）

千雨ちゃんをからかって楽しんでいる間に、一応ジジィも納得したらしくその場から解放された。

千雨ちゃんは記憶を残しつつも危険がないようにしつつ、監視だつてさ……。もちろん監視するのは俺

千雨ちゃんの嫌そうな顔が面白くてたまらない。

教員室に戻るとガクガク震えているネギくんがいた・・・ああエヴァちゃんがトラウマになっているのか

からかうと自分が魔法使い側の人間だとバレそうなので、からかいづらい・・・つまらん

あまりにもつまらないし今日は授業もないので、今日はサボることにする。

屋上で暇を潰そうと屋上に入ると授業中なのにサボって寝ている金髪ロリ娘がいた・・・しょうがなく額に肉と書き、離脱

気配も完全に消していたのでバレないだろう。

不意に今日はあの変態オコジヨが学園に侵入する日だと思い出して、捕獲に向かう。

もちろん変装することは忘れない
福 ボイスの狐仮面の登場である。

オコジョが寮に侵入する前に発見と同時に捕獲し、胴体がちぎれんばかりに握りしめる。

「ぐふえ・・・ちよつ死ぬ」

「シネ」

わりと躊躇いはない。

オコジョが気絶したのを確認し、持っていた皮の袋に入れる。

このままク エラさんのところに持って行って毛皮を剥いてもらおうかなどと思いながらも、このあとどうするか迷い、とりあえずネギくんを待つことにした。

気配を消して隠れてネギくんを待ち伏せしていると、何故か長瀬と

大河内に見つかった・・・廊下にある梁と梁の間に手と足を突っ張らせて張り付いていたんだが
普通は気づかないだろ

「何をしているんでござるか？」

「・・・忍者ごつこだ」

「・・・ふむ、それは・・・おや？喋れたのでござるか？」

「こちらにも色々あってあの時は喋れなかったんだ。すまない」

「いや気にすることではござらんよ・・・ふむ、それにしても全く気づかなかったでござるよ」

ニンニン修行不足かなとか小声で言うな

「長瀬・・・彼は誰だい？」

「ああ大河内殿は知らなかったでござるな。こちらは前回の期末テストの時図書館島でお世話になった御人でござる・・・名前は、聞いてなかったでござる」

「私の名前は九尾 狐太郎。気軽に狐仮面とでも呼んでくれたまえ」

いまだに上に張り付いての挨拶である。

「明らかに偽名のようにござるが・・・まあいいでござるよ」

長瀬は何か納得している・・・多分ジジイのパシリとか思ってるんだろうなあ」

「で狐仮面殿は何用でそこに張り付いているでござるか？」

「ネギくんに用があつて趣味と趣味を重ねたこのスタイルで待ち伏せしているという訳さ」

「趣味しかありませんよね」

うむ初対面の人にもツツコンでくるその心構えは素敵だぞ！

大河内を称賛しつつも、若干飽きが入ってきたので降りる。

「初めまして大河内アキラ。学校は楽しいかい？」

「はい。毎日楽しいです」

大河内はいきなり話し掛けられたことに戸惑いつつも、ちゃんと対応してくれる・・・エエ娘や！

「それは重畳。君達が楽しめればそれでいい」

そう言いながらつい癖で大河内の頭を撫でる・・・ふむさすが女の子柔らかい

「うわっ!?!・・・あっ」

「拙者は空気でござるか？」

最初は戸惑っていたものの今は俯いている・・・やはり可愛いな長瀬が何か言っているが無視

撫でているうちにネギくんが来たのでしょうがなく長瀬たちと協力し、誘拐

大浴場までついていくのはまずそんな気配がしたので、逃亡しようとしたら長瀬と古菲が目の前に立ちはだかる・・・ちっ

「逃がさんでござるよニンニン」

「今回はイベントだから楽しんでいくといいアル」

水着で立ち向かうなよ

「水着は好きな男に見せてあげるといい」

「性別が不明なので問題ないアル」

「ふむ確かに」

アホか！？

「私は男だ。それに他の女の子が嫌がるだろ？」

「問題ないでござるよ。木乃香殿が皆にどれだけいい人が触れ回っているでござるから」

「くっ」

あの天然ポヤポヤ娘が！！

余計なことを！

ジリジリと後退しつつ、打開策を考える。

スタングレネードを使えば・・・駄目だあいつらの楽しみを奪うわけにはいかない。

くっ手詰まりか!?

ヤバいあちらからパパラッチが笑顔で駆けてくる・・・後ろに何人か引き連れて

若干頼が引き攣った。

あのパパラッチふざけんなよ、なんで援軍連れてくんだよ!?

まずいまずいぞ・・・かなり焦りだす俺

仮面の下は冷や汗がダラダラである。

「あっ・・・」

そして最終手段を思い出す

ベルトにぶら下げていた皮の袋をとり、中身を掴み長瀬に向かって投げる。

「ふんっ！必殺工口妖精投げ!!」

途中で気がついてウニヨウニヨ動いていたのでちょうどよかった。

そのままエロオコジヨが好き放題やっている間に離脱し、その場から逃げ出すことに成功する。

達成感がマラソンよりあったことをここに宣言しておこう。

離脱後、学園を徘徊していると明日菜ちゃんがエヴァちゃんと茶々丸ちゃんと対話していた・・・ちなみに明日菜ちゃんの肩はプルプル震えている。

茶々丸ちゃんは話すか迷ってオロオロしている。

エヴァちゃんはそれに気づかずに色々と饒舌に語っている・・・あつ明日菜ちゃんが耐え切れなくて爆笑してる。

茶々丸ちゃんがエヴァちゃんに鏡を渡しちゃったよ・・・あぁつまらない

エヴァちゃんは額に肉と書いてあるのに気づきプルプルと震え出す
キレテルキレテルよエヴァちゃん

そして何故かこそこそと覗いていることに気づかれた。

「貴様かつ!!」

「何故!？」

なんの迷いもなく俺に襲い掛かってくる・・・この後日付が変わる
まで逃走を続け、次の日に学園に氷の彫像が出来ていたのは言うまでもない。

《
続
》

13話：暖かくなると変態が増えるというがわりと世の中四六時中変態だらけで

ボツネタ1

学園長室から出て少し千雨ちゃんと歩きながら会話することにした。

「なあ先生アンタはどれくらい強いんだ？」

「うゝん。戦いでは強さとかあんまり関係ないけどそれなりには強いよ」

「へえ・・・なんで強さは関係ないんだ？」

千雨ちゃんはわりと不思議そうに聞いてくる
甘い甘いぜちうちちゃん！！

「個の強さは数や知恵で一瞬で倒されちゃうからね」

「・・・なるほど」

「例えば、64版のゼダの伝説でふざけて鶏ばかりに攻撃していると、鶏が集団で反撃して主人公を倒してしまうのがいい例だね」

「おい待て」

「ガノドルフを倒しておいて鶏に負けるんだぞ！？鶏だぞ鶏！？世界を救つといて、鶏ごときに負けるとかまじで焦るぞ！？」

「落ち着けよ！！今の子供は64知らないやついるから！というか微妙な知識はいらない！」

以上

お楽しみいただけたでしょうか？

さすがに上のはマニアックすぎていれるのやめました

というか僕のネタが基本濃いという説もありますがそれはスルーで

今回はあんまり考えてませんが、なるべく早く更新する予定です

次回もお楽しみに？

14話：一切の罪悪感もなしに（前書き）

14話です

最近こっちがメインになってる気がします

今回はギャグはなし

誤字脱字は報告お願いします

14話：一切の罪悪感もなしに

今まで生きてきた中でこれほど自分の愚かさを憎んだことはないだろう

俺は完全に忘れていた・・・オコジョが生かしておけば起きてしまうイベントを

茶々丸ちゃんが襲撃されるという最悪のイベント

原作通りなら心配ないのだが、俺というイレギュラーがいる限り安全など保障できるものじゃない

それに2、3日様子を見ていたが玉葱小僧のエヴァンジェリンに対する恐怖が度を越している。

確かに休み時間のたびに国語の課題ということで吸血鬼についての恐怖を語り続けたが・・・それが原因か？

とにかくにも俺は本気で焦っている。

学園内を徘徊してる時にタカミチに連れられ、学園長室に向かっているエヴァンジェリンとすれ違わなければ完全に忘れていた。

すでに狐仮面不審者丸出しセットに変装し、今茶々丸が襲撃されると思われる場所に向かっているのだが・・・くっ見つからない！

人の目など気にせず学園中を駆け回るが全く見つからない。

まずいますいぞー！

あのクソガキが本気でぶっ放したら茶々丸ちゃんなんかすぐにスクラップになっちまう

くそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく
くそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

お前ごときに俺の友達を殺させるかよ！

ああ畜生！！

こんなことなら茶々丸ちゃんにも式紙をつけておけばよかった

そしてとある公園の上を通ったときに、ようやく見つけた。

すでに戦闘は始まっており、クソガキも詠唱している・・・ここから割り込めるか!?

ちっ全力で行くぞ！

『光の精霊29柱・・・
集い来たりて・・・』

29柱だと！？

ふざけんな！！

完全に殺す気まんまんじゃねえか！

また原作と変わりやがって・・・

『魔法の射手

連弾・光の29矢！！』

「追尾型魔法至近弾多数・・・よけきれません」

諦めてんじゃねえよ！！

「すみませんマスター、先生・・・もし私が動かなくなったらネコのエサを・・・えっ！？」

「温いこと言ってんじゃねえ!!」

瞬動を使いまくり、ギリギリで茶々丸ちゃんと魔法の矢の前に立ち
はだかる。

明日菜ちゃんがこちらを見て驚いていたが、今はそんな場合じゃない

足に気を溜めて、迫りくる魔法の矢を蹴り壊す。

「うおおおおー!!」

一瞬しか溜められなかったが、まだクソガキの魔力の操作が甘いのでギリギリ相殺できた・・・まあ多少は怪我をしたけど

すぐに背後を振り返り、茶々丸ちゃんの怪我がないことを確かめ抱きしめる。

「よかった。本当によかった・・・間に合わなかったら俺はまた自

分を許せなくなるとこだったよ茶々丸ちゃん。本当によかった・・・」

「えっ・・・あの」

茶々丸ちゃんがオロオロしているが気にせず抱きしめ続ける。

「やい！てめえなんで邪魔しやがる！」

「・・・・・・・・・・。」

安堵のあまり忘れていた。

どうして茶々丸ちゃんがこんな目にあったのかを

そしてこの世界に来て初めて激怒した・・・絶対に生かしては帰さない。

俺は血まみれになった足を引きずりながらも無言で振り返りクソガキとクソガキをしかけたクズを睨む

その幽鬼のような様を見てネギと明日菜は怯え、カモは動けなくなつた。

完全なる死を感じたのである。

神楽坂には多少痛い目を見てもらう
さすがにお仕置きは必要だ

餓鬼どもは調教・・・いや、懲、教してやろう

なめたことしやがって・・・俺は躊躇いなく背中に隠してあった日
本刀を抜く

まずは左手をいただく

そう思い瞬動をしてクソガキの後ろに立とうとすると・・・茶々丸
ちゃんが俺の目の前に両手を広げて立ち塞がった。

「どいてくれないかな？」

「いえどきません。落ち着いてください」

「あいつらは死なないと何も分からないんだよ？

君は彼等に殺されかけたんだよ？」

「私は生きています。だから止めてください」

「駄目だ・・・神楽坂明日菜はともかく、ネギ・スプリングフィー
ルドそしてアルベール・カモミールには死を与えるか生を後悔させ

る」

茶々丸ちゃんを退かせて、斬ろうとするが茶々丸ちゃんはどうもいない。

「退いてくれ」

「いいえ退きません・・・本当に大丈夫ですから、貴方が手を汚す必要はありません」

「・・・・・・・・・・。」

後ろでガタガタと愚かに震えているクソガキとクズを無言で見据えながらも、一応刀をしまう。

クズがクズなりの意地を持って話し掛けてくる。

「どっ・・・どうしてそんな悪党の味方をするんでえ!!」
「悪党？」

「おうよ！そいつは600万ドルの元賞金首の相方だぜえ！？そんな極悪人の「だからどうした？」・・・えっ？」

クソガキに躊躇いがなかった原因の一つがこれか・・・

原作と違って茶々丸ちゃんを襲撃する前に調べたんだな・・・だけど

「それがどうした？友達が極悪人の相棒だろうと友達は友達だ。友達との絆に善悪の差異なんか関係ない」

「なっ・・・それは・・・」

クズが勢いを落とす。

「ロボットであれ極悪人の相棒であれ俺にとって絡繰茶々丸は友達だ・・・それを殺そうとするやつには容赦はしない」

殺気を込め、クズを睨む

「ひっ!？」

クズは怯えてクソガキの肩でガクガクと震える

「それと・・・お前だ。ネギ・スプリングフィールド」

「あっ・・・はい」

クソガキはビビりながらもちゃんとこちらを見て応対してくる。

「俺は卑怯やズルや姑息な手は大好きだが・・・醜い卑怯やズルや姑息な手は大嫌いだ。貴様がやったことはゴミムシにも劣る醜さだ、生きている価値すらないほどのな」

「なっ！」

「・・・・・・・・」

俺の言葉に怒る明日菜ちゃんと黙るクソガキ

「何故勝負のときにしない？
何故不意打ちで2対1で襲う？」

何故てめえの生徒をてめえで殺そうとするんだっ!!」

「・・・・・・・・・・。」

「ちょっと!!言い過ぎよ!それに最初にそっちが襲ってきたから・
・・」

「不意打ちでか?それにそのときこちらは殺そうとしたか?」

まあ多少詭弁だが

「・・・・・・・・・・。」

「でつでも・・」

完全に黙るクソガキとまだ言い縋ろうとする明日菜ちゃん

いつもならここで止めるが今回は違う。

俺は・・・・怒ってるんだ

「神楽坂明日菜。貴様にも罪はある」

「えっ私はネギに頼まれて・・・「ふざけんなっ!!」・・・っ」

「てめえは頼まれたら人殺しをホイホイ請け負うのかよ？笑えるな、二年間一緒だったクラスメイトを頼まれたらホイホイ殺しちゃうんだから」

明日菜ちゃんは俺の言葉でどんどん顔色を悪くしていく

「ロボットだからとか関係ないからな、絡繰茶々丸が自分の意思で動いている限り、絡繰茶々丸はヒトだ。お前はそれをクソガキにせがまれたからって殺そうとしたんだぞ？」

「っ!・・・。」

自分の仕出かしたことに気づき、自責の念で俯く明日菜ちゃん

「分かったら失せろ。次こんな真似をしたら容赦も躊躇いもなしに殺す。クソが・・・何が英雄の息子だ笑わせんな」

俺は茶々丸ちゃんの手を引き、その場から踵を帰す。

茶々丸ちゃんは大人しく俺の後についてくる。

後ろから啜り泣くような声が聞こえるが、今は関係ない。
少しは後悔しろ

無言で歩いていると不意に茶々丸ちゃんが立ち止まった。

「先生・・・足が・・・」

足を引きずって歩いていたら、茶々丸ちゃんに足の怪我に気づかれ止められる。

大丈夫だと言いつ張ったが、聞いてくれずにお姫様だっこをされ病院まで連れていかれたorz

格好がつかねえ

そして足を治療された後、エヴァちゃん家で後悔した・・・やり過ぎた。

あんな子供相手にぶち切れるなんて大人げなさすぎないか俺？

しょうがなく、長瀬の部屋に投げ文をして明日ネギくんが森に行くのでそれとなく励ますよう頼んでおいた。

はぁ偽善者め

《続く》

14話：一切の罪悪感もなしに（後書き）

はいお楽しみいただけただけでしょうか？

今回はネギをいたぶりすぎました
というかカモがうざい

ネギくん好きな方はごめんなさい

今回は一旦エヴァちゃん襲撃編から抜けるかもしれません

次回もお楽しみに？

15話：前準備というかアフターケア（前書き）

はい15話です

うんグダグダですね
わかります

誤字脱字は報告お願いします

そういえば三作品目を投稿したんで、そちらもぜひお読みくださいな

15話：前準備というかアフターケア

はいどうも昨日やりすぎたことを反省している孝明くんです

ええ案の定野菜少年は飛び出していったみたいなんですが・・・明日菜ちゃんが追いかけて行かなかったみたいです（式紙情報）
なんか「自分のことで手一杯だから・・・ごめん」とか言っていた。
めちゃくちゃ落ち込んでいるみたいで、今現在堤防みたいところで体育座りでいじけているみたいです。

なんでそんな青春スポットにいるのかね？

・・・はあ

しょうがない

わりと投げやりな思考でお決まりの不審者フォームに変身して、明日菜ちゃんのいる堤防へと向かい発見、後ろから忍び寄り声をかける。

「おはよう神楽坂明日菜」

「っ!!.....」

肩がビクツと震え、さらに俯いてしまった。

「ふむ、君はあいさつのできるいい娘だったはずなんだがな・・・」

「・・・何よ・・・また責めにきたの？」

明日菜ちゃんはぐもった声で応対してくる。

「いや違う。謝りにきたんだ・・・すまない昨日は少し言い過ぎた」
「.....」

そう言っ頭を下げたが、明日菜ちゃんの返事はなくただひたすら俯いている。

少し間を空け、明日菜ちゃんの横に座り話をする。

「昨日は君達の言い分を全く聞かず責めすぎた・・・すまない。だが、友達が傷つけられるのがどうしても許せなかったんだ」

「・・・あなたが謝る必要なんかないわよ。

私たちが間違ってたんだから

あんたの言う通り私はネギを止めるべきだったわ

そして友達を助けるために動いたあんたは間違いなんかじゃないわ・
・・」

まだ俯いている明日菜ちゃん

うおおおやりすぎたっ!!

これ絶対怒られる!!

というかこんなに落ち込むとは思ってなかった!

くそっ人を慰めるなんて俺に出来んのかよ!?

「間違えたことは分かっているんだろう神楽坂明日菜?」

「・・・ええ本当に馬鹿だったと思うわ」

「なら大丈夫君は間違ってたんじゃない」

そう言っただけ俺は頭を撫でてあげる。

「確かに君はネギくんの間違いをひっぱたいてでも止めるべきだった。これは君の落ち度であり間違いだ。なんの慰めも出来ない・・・しかし君はこうやってそれを反省してる。それは決して間違いなんかじゃない」

「・・・・・・・・。」

明日菜ちゃんは撫でられ俺の話を静かに聞いている。

「月並みでありきたりでベッタベッタな台詞だが・・・君だって間違える。完璧で完全に正しい人間なんかいないだから、人間は反省するんだ。君の間違いは私が叱ってあげよう、だから俯くのをやめて前を見る」

「・・・・・・・・うん」

「反省を活かすために顔を上げ前を見続ける」

「うんっ!..!」

明日菜ちゃんは不意に立ち上がり前を睨み続ける。

そんな姿を見て不覚にも微笑んでしまった。

「さあて神楽坂明日菜・・・「明日菜」んっ？」

「明日菜でいいわよ」

明日菜ちゃんは俺の顔というか仮面を見ずにそっぽを向きながら言うてくる。

「明日菜ちゃんはどうだ？」

「ちゃん・・・まあいいわ」

「くっくっ・・・」

「何笑ってんのよ!!」

「なんでもないさ・・・さあて明日菜ちゃん。君はすでにこちらの世界にくる決心をしたんだろう？」

「・・・よく分からないわ」

「ネギくんと仮契約をする。それはこちらの世界に踏み込んで生き死にさ迷い、強くならなければならぬことを意味している」

「・・・・・・・・。」

「君が選んだのはそういう道だ。今ならまだ「強くなるわ」・・・・・・」

「強くなつてあいつが間違えたときひっぱたいて正しい方向に行かせてやるんですから」

明日菜ちゃんとはびきりの笑顔で俺に向かって自分の決意を宣言する。

「ふつなら言うことはない・・・君の決意は見せてもらった。いづれ試させてもらうが・・・その前に強くなりたいんだろっ？」

「ええ強くなりたいわ」

「なら私が戦い方を教えてやる」

「えっ！？本当に！？」

「ああ本当だ」

元々死んで欲しくないからある程度は強くするつもりだったから丁度いいかな

「まあ戦い方だけで技とかは全然教えないので悪しからず」

「何よそれゝなんか必殺技とか教えなさいよ！」

「私の必殺技は999あるから全てを教えるには……」

「多すぎでしょうが！-！」

くだらないコントをして後日放課後から明日菜ちゃんの修行を始めることにした。

さて後は野菜少年だが……まあ糸目忍者が頑張っているから

俺が行くのも野暮かな

そう思い帰宅しようとしたら・・・木乃香ちゃんと遭遇した。

たたかう

どうぐ

ポケン

にげる

にげられ ない

にげる

にげられ ない

「あつ狐さんやゝおはよう」

「おはよう近衛木乃香」

「ああん木乃香でええよ」

「・・・では木乃香ちゃんと」

ヤバい絶対なんか狙われてるよ
超顔をガン見してるし

「では私は用事があるので失礼するよ」

ガシッ

逃げようと踵を返した瞬間腕を捕まれた・・・逃げられないっ！！

「なあゝなあゝやつぱりどっかでおうつとるよな?」

「気のせいだろう。地球上には似た人が3人いるという話があるぐ
らいだからな」

やれるとこまで頑張る。
それが俺！

「ふうん」

「……………」
（滝汗）

「まあええわ……なあ狐さん？」

「なんだ？」

「ちょっと相談したいことがあるんやけど……聞いてくれる？」

「いいだろう」

そうして木乃香ちゃんが言ってきたのは、刹那ちゃんのことであった。

どうみても避けられている気がするので自分は嫌われているのだと悲しそうに言ってくる。

何故俺に助けを求めるんだ！？

「君とその娘は仲がよかったのだろう？
なら直接聞いてみるんだ……逃げられても逃げられても絶対に諦めない。そんな気持ちが大敵だと、私は思うよ」

「うん!!ウチ頑張ってみる!!」

「ナイスガッツだ」

そう言って頭を撫でる・・・うむ撫でるのが癖になっている。

まあ可愛い女の子ばっかだからしょうがないか

などと自己完結をして、木乃香ちゃんとその場で別れた（逃げたとも言つ）

そして言うまでもなく、木乃香ちゃんと刹那ちゃんの追走劇の幕がある。

その後刹那ちゃんはずっとガチ逃げをし続けている。
時には川の中時には茂み時には森の木の上など・・・忍者と同じような行動をしている。

そして俺と会話する羽目になるのはまた別のお話である。

明日菜ちゃんは立ち直り、ゴミオコジヨと一緒にネギくんを探し回っている。

野菜少年は今頃糸目忍者と風呂にでも入っているころだろう・・・
次の日系目忍者にお礼を言いにいき、修行の相手にさせられたorz

そしてちゃんと明日菜ちゃんとの訓練も続けている。

今も明日菜ちゃんをぶん投げたところだ。

エヴァちゃんとのバトルまでそう時間はないけど、やらないよりは
ましかな？

ああどんどんやることが増えていくよ

まあ楽しいからいいけどね

《続》

15話：前準備というかアフターケア（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

三作品目の製作でこっちを書く暇がなかったですorz

なら書くなって話なんです、すいません衝動的なもので

三作品目はゼロの使い魔

タイトルはゼロの使い魔〜魔眼を持ちし霸王〜です。

やはりオリ主もの
そしてチート

チート大好きwww

今回は多分ネギちゃんとエヴァちゃんとのバトルです

次回もお楽しみに？

16話：野菜対チユパカブラ（前書き）

遅くなりました

誤字脱字は報告お願いします

16話：野菜対チユパカブラ

どうも孝明です

ネギくんがエウゝアちゃんに果たし状を出すのを思い出し、一時的に女子寮に帰宅

何日か寝泊まりをし時期を待つ

ちなみに女子寮にいる間に何人かに遭遇し騒がれたのはまた別のお話である。

そしてようやく決闘の日！！

長かったここに至るまでの道は長かった！！

何回挫折しかけたか！！（作者が）

佐々木たちを利用する気だったエヴァちゃんを説得して代わりに俺がネギくんを呼び出し襲う役となりました。

野郎の衣服を剥ぐ趣味はないけど、しょうがないか

なんか佐々木たちを使われるのは嫌だったというか・・・友達が操られて嫁入り前の身体を晒したり怪我するのは好ましくないのだ

とりあえずライドブッカーからディケイドのカードを取り出しつつ、ディケイドライバーを装着

「変身っ!!」

『カメンライド・・・ディケイド!!』

掛け声と共にディケイドライバーにカードを挿入しバツクルをスライドさせ、マゼンダを基本とした仮面ライダー、ディケイドに変身する。

さらにライドブッカーからカードを取り出し変身

『カメンライド・・・W!!』

右手側が緑、左手側が黒で両目が赤の仮面ライダーWに変身する。

さらにさらにまたカードを取り出し挿入

『フォームライド・・・ルナトリガー!!』

今度は右手側が黄、左手側が青に変わる

遠距離戦闘をメインにしたWのフォームである。

自由自在に操れる弾丸を放出することが可能だ

さあて今回は原作フルブレイクでいくぜ!!

まず学園をパトロール中のネギくんの前に出現する。

「ひっ!?!」

「どうもネギ・スプリングフィールド。我が名はチャチャダブルエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの従者の一人だ。

我が主エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが　橋でお待ちだ・・・ついてきたまえ」

名前なんざテキトウに偽名である。

ちなみに　橋は原作でネギさんとエヴァちゃんが戦った場所である。

「はい・・・あつちよつと待ってください!?!」

そう言つてネギくんは隠してあつた対エヴァンジェリン装備を装着している。

「大丈夫です!?!」

「では行こうか・・・後ろにいる君も一緒にきたまえ」

「えっ!?!」

俺の言葉に反応し後ろを確認するネギくん

すると背後から隠れてついてきていた明日菜ちゃんが出てくる。

「なっ！？なんでアスナさんがここに?!」

「師しょ・・・狐仮面に今日エヴァンジェリンさんが動くって聞いたからあんたをつけてたのよ」

「でも僕はアスナさんに迷惑をかけるわけには・・・」

「何言ってるのよ。ずっと前からかけてるじゃない今更よ今更」
「でも・・・」

「私が来たくて助けに来たんだから迷惑でも何でもないの！
協力するからチャッチャと問題児をどうにかするわよ！」

「じゃあ姐さん仮契約の更新を！
前みたいにおでこじゃ力も中途半端であいつらには勝てないっすよ
!!」

再仮契約を迫るアホオコジヨ
そして何故か俺に視線が集まる。

「あのちよつと時間いいですか？」

「敵が許してくれるわけないでしょうが!!」

「いや好きにしたまえ・・・我々が望むのは完全な勝利だからな」

そう言っただけを向くすると後ろから光が輝き仮契約が成功したことを理解した。

「終わったならいこうか」

ネギくんたちを引き連れエヴァちゃんが待つ橋に着く

「連れて来たぞマスター」

「・・・ああ」

なんだその嫌そうな顔はそんなに俺が従者役は不満か！？

とりあえずエヴァちゃんの横にたちネギくんと向かい合う

「満月の前で悪いが・・・」

今夜ここで決着をつけて坊やの血を存分に吸わしてもらっよ」

「・・・わかりました

でもそうはさせませんよ

今日は僕が勝って悪いコトをするのはやめてもらいます！」

睨み合いをするネギくんとエヴァちゃん

戦いが始まる前に罠の位置を確認する・・・ちよつと真下だったぜ
！！

「今だ！」

ネギくんが不意に罾を発動させるが俺は横っ跳びで転がりながらその場から離脱

わざとらしく汗を拭うような動作をして立ち上がる。

「ふう危なかった」

「おい」

綺麗な直立で立ち続ける

「・・・・・・・・。」

「お前だよお前」

後ろから捕縛結界に捕まった吸血生物の声が聞こえる・・・はて誰を呼んでいるのやら

「・・・・・・・・。。。」

「わざとらしく汗を拭った貴様だよ貴様!!」

えっ!? ボク?

「なんでしょうかマスター?」

「お前罫があること知ってただろ?」

「ワタクシにはそのような機能はございませんが?」

「いや察知してただろ!? 反応がめちゃくちゃ速かったからな!!」

「はぁ・・・そんなわけないじゃないですかマスター?」

少し嫌なイントネーションで言う

「キッー!! ムカつくっ!!」

「さあてワタクシ一人となりましたがお相手致しましょう」

ネギくんたちと向き合い青い縦幅が長い銃を構える。

「くっ」

そして発砲

ネギくんの持つてきたアイテムを剥ぐように弾を掠らせる

明日菜ちゃんには牽制程度に適度に発砲

ネギくんのアイテムが全てなくなったところに

パツリーンとガラスの割れるような音と共にエヴァちゃんと茶々丸ちゃんの動きを封じていた捕縛結界が破壊される。

「なっ!？」

驚愕し愕然とするネギくん

「えっ・・・そんなウソ
ずるいッ」

「15年の苦汁をなめた

私がこの類の罠になんの対処もしていないわけがないだろうが・・・
」

若干涙目なネギくんと嬉しそうな笑みを浮かべるエヴァちゃん

「さあて仕切直しだ。行くぞ
私が生徒だということは忘れ
本気でくるがいいネギ・スプリングフィールド」
「・・・はい!」

「姉上は下がっててください・・・ワタクシがあの子の相手を
務めます」

「・・・わかりました」

『契約執行90秒間!!ネギの従者『神楽坂明日菜』!!!!!!』

俺は明日菜ちゃんとのバトルを開始する
茶々丸ちゃんは今回はお休みである。

無詠唱の魔法の射手光の5矢を空中で待機させ、1矢ずつ放っていく

ちなみに5矢しか貯められず、1矢を作り直すのに3秒かかるという設定だ

明日菜ちゃん自分に向かってきた魔法の射手を魔力で強化された拳で弾きながら間合いを詰めてくる。

明日菜ちゃんが手を動かしたら足に足を動かしたら手に・・・と悪質な方法で足止めをする。

「ちょっと！！ちゃんと戦いなさいよ！！」
「これがワタクシの戦い方だ」
「くっム力つくわね！！」

明日菜ちゃんが猪のように突っ込んでくるので5矢を同時に放ち四肢を狙い動きを止める

「君は猪かね？」

「うつうつるさい!!」

全く教えたことの意味がないじゃないか

ちなみにネギさんとエヴァちゃんとの戦いは空気である。

そして何回か同じようなことを続けようやく明日菜ちゃんが俺の作った設定に気づき、弾がつきて3秒が経つ前に間合いを詰めてなくりかってくる。

「くっおしい!!」

それを首を後ろにすることによってかわし、魔法の射手を放ち再び間合いをとる。

うん第一段階合格
第一の教え

冷静に状況を見極めて相手を分析して相手を知れ
クリア

第二段階に移行と

今度は銃を抜き、発砲

弾数制限がなく、連射性能も高いので先程より厄介である。

最初は先程と同じように弾を弾いていたが、今は弾の速さに間に合
わずかわしている。

「くっ男ならかかってきなさいよ!!」

「淑女なら慎み給え」

「大きなお世話よ!!」

「ほらかわしきれてないぞ?」

「そつちも大きなお世話よっ!!・・・ぐっ」

弾が掠り動きが鈍る明日菜ちゃん
ほら教えたことを思い出して!

明日菜ちゃんは不意にハッと何かを思い出したような顔をして屈み込み、弾がぶつかったことによって砕けた道路のアスファルトを拾っている。

再び突っ込んでくるが先程とは違い1→2発かわしたところで今度は俺の手元にコンクリートのかけらを投げってくる。

手にぶつかつたふりをして弾道をそらしてわざと隙をつくる。

その隙をぬって俺との間合いをつめ俺の腹にえぐい肘をえぐりこんでくる明日菜ちゃん

俺相手じゃなきゃ死ぬぞ!?

錐揉みに吹き飛ばされる。

第二段階合格

第二の教え

敵の得意な間合いで戦わず無理矢理隙をつくり掬込め
クリア

もう疲れたから終わりでいいよね、アスラッシュ？

というか第三段階もあつたけど

今まで空気がったネギくんとエヴァちゃんのバトルがエヴァちゃんがネギくんのエロ魔法で真っ裸にされることにより終了していた。

すかさずカードを取り出しディケイドライバーに挿入

『フォームライド・・・ルナメタル！』

今度は左手側が黄、右手側が銀の姿となる

ルナの力で自由自在に伸び縮みするようになった棒メタルシャフトを装備したフォームだ

そして俺がフォームチェンジし終わると同時に停電が復旧し止まっていた学園結界が発動し、エヴァちゃんの魔力がなくなる。

魔力のなくなったエヴァちゃんは「きゃん」といいながら空中が落ちてくる・・・メタルシャフトでエヴァちゃんを掴みこちらに手繰りよせる。

ふうこれでネギフラグはへし折ったぜ

手繰りよせたエヴァちゃんを離して変身を解く

「あっ!!」

ちなみに今の格好は狐仮面である。まだ正体を明かす気はサラサラない

「師匠!?!」

「「師匠?!」」

明日菜ちゃんの声にたいして反応するネギくんとエヴァちゃん

まあ無視するけど

「よくやったな明日菜ちゃん。ちゃんと教えたことが身についていたな」

「はい、ありがとうございます！！・・・でもどうして師匠が？」

「いや試験のつもりだったんだが・・・」

「ほう・・・貴様は真面目に協力する気はなかったわけか？あまつさえ神楽坂明日菜を弟子にとって・・・」

うん死亡フラグ

俺はその場から全力で逃げ出した。
後ろから怒鳴っている吸血生物の声が聞こえたが華麗にスルー・・・
何日したら許してくれるかな？

《
続
》

16話：野菜対チユパカブラ（後書き）

疲れたよ

疲れたよヒサラッシュ（友達）

もういいよね？

もうリリカルなのは見てもいいよね？

17話・我ドSなり（前書き）

更新！！

変身風に言っ て見ました

今回は刹那ちゃんファンに嫌われる話となっております

誤字脱字は報告お願いします

17話：我ドSなり

エヴァちゃんの家から脱走し女子寮に住んで二日目

とうとう・・・バレました。

「・・・孝明さん」

「・・・・・・・・。」

「分かってるんですか孝明さん？」

「・・・・・・・・。」

「式紙に夜の警備やらせるなんてどういっつもりなんですか？」

「チツ・・・・・・・・うざっ（ぼそっ）」

「・・・はあ。全く今日からは必ず生身で夜の警備をしてください。
お願いしますよ」

「やりやあいいんだろやりやあ」

式紙に夜の警備の仕事をさせているのがバレましたorz

別に式紙でもいいだろ

なんせガンドルフィーニの2倍の強さだぞ？

正直俺よりもガンドルフィーニがいらないから

てなわけで学園の森でふて腐れる俺

やはり格好は狐仮面v r・入野 由

音声だけ変えてみた。

ああ萎える
萎えるわ

はあ誰かにちよっかいだそう・・・誰にしよう

獲物を探していると近くから

『斬岩剣』

ドンッ！

獲物の俺を呼ぶ声が聞こえる・・・ミツケタ（・・・）

どうやっていじろうかな

とりあえず刹那ちゃんを援護している龍宮を退かさないと

俺は懷から携帯をとりだしコール

『はいもしもし儂じゃが?』

「孝明だ。今近くに龍宮と桜咲がいるんだが龍宮を退かせろ・・・
代わりに俺が入る」

『何をやらかすつもりじゃ?』

「べつに」

『・・・嘘くさ(ボソッ)』

「その洋梨みたいな頭ミキサーにかけんぞジジイ」

『ゴホン・・・よかるう』

ピッ・・・プープー

さらに

「変身っ!!」

『カメンライド・・・ディケイド!』

変身しさらにライドブッカーからカードを取り出し

『カメンライド・・・シン!』

生體的な身体を持った
仮面ライダーの中でもっとも怪人に近い仮面ライダー、シンに変身する。

よしこれでとりあえずの準備は完了

あとは龍宮の気配が遠ざかるのを待つて・・・よし行っただぜ

さあ刹那ちゃん

ああ楽しみだ

シンのまま刹那ちゃんの前に飛び出し吠える。

「GYAAAAA——!!」

「なにっ！？敵か！」

刹那ちゃんは俺の容姿を見て敵と判断し野太刀『夕凧』を構える。

G A A A A A | | | | | | | | | |

吠えながら爪をたて刹那ちゃんに襲いかかる。

刹那ちゃんは夕凧で俺の爪を弾き、袈裟切りでかえすが、俺はそれをさけて一旦距離をとる。

あれ？あんまり強くなってないな

昔嫌がらせついでに発破をかけた効果が出てなくね？

「GARUUUUUU——！」

再び吠え今度は瞬動で刹那ちゃんの懐に入り武器を握っている腕を掴む。

「しまっ・・・！！」

刹那ちゃんは驚いて逃げようとするがすでに遅く、俺は刹那ちゃん

の腕を掴んだまま振り回し地面に叩きつける。

「がつ！」

痛みで呻き声をあげる刹那ちゃん、しかし俺はそこで止まらずに踏み付けを繰り返す。

「がつ！！ぐつ！」

踏まれるたびに呻く刹那ちゃん・・・やばいなんか変な方に目覚めそう。

多少痛めつけ最後に気絶させた。

すぐに気絶させたら怪しまれるからね・・・決してS心が出たわけじゃないんだからね！！

多少やり過ぎた感はあるがしょうがない！！

変身を解き、その場から逃走

で翌日

絆創膏や包帯を装備したボロボロの刹那ちゃんが席に着いてました・
・うんやりすぎた。

そんな刹那ちゃんを心配げにチラチラ見ている木乃香ちゃん

・・・あとで土下座するか

多少の罪悪感を抱えたまま授業が終了し、そのまま帰宅

夜中になり何もすることがないのでコンビニに夜のお供を買いに行く
だってエヴァちゃんの家にいるときに買ったらエヴァちゃんに殺さ
れるじゃん・・・今しかないんだよ!!今しか!!

と誰かに言い訳をしつつ物色・・・おお「どうかこの厭らしい牝豚を虐めてください」か

最高だな！！
買いだな買い

レジに持って行き購入ビニール袋（透けないやつ。透けるやつは笑えない）に入れて歌を口ずさみながら持ち帰る。

「恋は甘くて苦いもの」
単純明快複雑怪奇な代物
どうでもいいことばかり気にしたりするの
どんな感じ？損な感じ」

ヒュッヒュッ

奇妙な音が聞こえたので、そちらの方に行ってみるとボロボロの姿

で悔しげに唇を噛み締めながら夕風を振る刹那ちゃんがいた・・・
ああ意味なかったか

今回の件で恐怖とかを覚えさせたかったのに・・・甘かったかな

俺は少しでも気持ちを切り替え刹那ちゃんに近づく

刹那ちゃんは近づいてくる俺に気づき素振りをやめこちらを見ている。

「こんばんは桜咲さん」

「・・・こんばんは先生」

「こんな夜分に女の子が一人でいるなんて感心しないな」

「大丈夫です」

明らかに俺と話したくないオーラをだす刹那ちゃん

「ボロボロになってまで強くなりたいのかい？」

「……………」

うわぁ今すぐにも舌打ちしそうだよこの娘

「……守りたい人がいるんです」

馬鹿か

「へえ……その子が頼んできたの？守ってって？」

「っ！！……貴方に何が分かる！！！」

「分かるわけないでしょ、桜咲さん
どうして他人の君の気持ちが分かるんだい？」

「ちっ」

刹那ちゃんはあからさまな侮蔑の目を向けて俺に睨んでくる。

「私はやることがあるので失礼します」

俺から逃げようとする刹那ちゃん・・・そうはさせねえよ

「そうだねーなら少し遊ぼう」

「はあ？私は忙しいと・・・」

「いいからおいでよ、そんなだからなんにも守れないんだよ」

少し厭味を込めた口調でいい皮肉げに口を歪める。

「なっ！・・・いいでしょう大怪我をしてもしりませんよ」

夕風を構えだす刹那ちゃんに俺は手をだらんと垂らしビニール袋を持っただまま相対する。

「じゃあ負けた方が勝った方の言いなりね」

「・・・どうなってもしりませんよ」

刹那ちゃんは大きく振りかぶり俺に切り掛かるが俺は一瞬で間合いを詰め、まだ刹那ちゃんの頭の上にある刀の柄頭を空いている手で下から押して刀をすっぽ抜かせ奪う。

「えっ？」

奪った刀を何が起こったか理解できず呆然としている刹那ちゃんの首筋に当て勝利宣言

「はい終わり」

「えっ負け・・・た？」

「うん君の負け。さあてどんなお願いを聞いてもらおうかな」

「・・・もう一度！もう一度やらせてください！！」

納得できないのか俺に再戦をねだってくる刹那ちゃん・・・しょうがない

「いいよ、じゃあハイ」

奪った夕風を返し再び向かい合う

「やああああーっ！！」

今度は袈裟掛けに切り込んでくるが俺はわざとギリギリまでかわさず紙一重で避け、そのまま振り抜かれる刀を右足で蹴り地面に埋め込ませる。

さらに左足を柄にかけて刀の上にたち空いている右足を刹那ちゃんの首筋に当てる。

「はい2勝目」

「なっ・・・なんで？」

再び呆然とする刹那ちゃん、しかしそれを無視して一回離れて実行する。

「じゃあ僕からのお願いは・・・二度と刀を握るな」

「えっ？」

ほづけている刹那ちゃんに一瞬で肉薄し刹那ちゃんの右肩に踵落としをして鎖骨を叩き折る。

「がっ!?!?・・・なっ何をする!?!?」

「だから刀を握れないように骨を变形させる」

俺は暗い笑みを浮かべ再び同じ位置に足を振り下ろす。

「ぐっ」

痛みで膝をつく刹那ちゃんを無視して話しかける。

「ねえ君が守りたいその子は、君がそんなになってまで守って欲しいと思うのかな？」

「くっ・・・それは私が」

「君の意思なんざ聞いちゃいない。君に守られる者の気持ちを問いているんだ」

「・・・・・・・・。。。」

刹那ちゃんは無言になり俯く

「・・・嫌だろうね。大事な友達にそんなになられちゃ」

「・・・・・・・・。。。」

「泣いちゃうだろうね悲しくて」

実際泣いてたし・・・俺の近くで笑っていないやつは許さない

「私はただお嬢様を・・・」

「だからお嬢様がいらないうって言ってんの。君の任務は今日でおしまい。刀を捨てて女子中学生を楽しみなさい」

笑顔で言い放った俺の言葉に目を見開いて反応をする。

「なっ！？それは!？」

「近衛詠春様からの命令だ」

あいつに様付けとかなんか腹立つなあ
あの巫女服フェチめ!!

「・・・・・・・・。。。」

「では夕風は返してもらっ」

「あっ・・・」

俺は刹那ちゃんから夕凧を奪う

それを子供のような悲しげな目で見る刹那ちゃん・・・まだだめだな

「じゃあバイバイ」

そう言って俯いている刹那ちゃんに背を向けその場から立ち去る。

さあてこれで修学旅行突入かな？

ああ詠春に話し合わせなきゃな

《続く》

17話：我ドSなり（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

やはり刹那ちゃんには戦いか幸せかを選ばせます

ただし原作とは違う決断になるので悪しからず

次回もお楽しみに

18話編集集中

現在

この時点においてストーリー及び主人公のキャラクターが崩壊したので編集集中となっております

なおこの作品は優先順位が低いので編集が完了するのはとても遅くなると思います

それでも読みたいという方は気長にお待ちいただければ幸いです

b
y
x
x

以下字数稼ぎ

ルイズ！ルイズ！ルイズ！ルイズううううわあああああああ

あああああああああああん！！！！
あああああ．．．ああ．．．あっあっ！ああああああ！！
！ルイズルイズルイズううあわあああ！！！！
ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハー！スーハー！スーハー！
ーハー！いい匂いだなあ．．．くんくん
んはあっ！

18話編集集中（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

途中までは前回はあげた時点で書き終わってまして続きをどうするか迷っているときに感想をいただいたので

後半を棄て更新させていただきました

故にいつもより短めです

次回は全然考えてません

どうしようかな

次回もお楽しみに

19話：人？質って大事だよね？（前書き）

お久しぶりです

主人公が崩れていくorz

ああ修正してえゝ

まあでもこっから立て直します！

誤字脱字は報告お願いします

19話：人？質って大事だよな？

とりあえず二人の仲を修学旅行に行く前に取り持ってみることにしたのだが・・・刹那ちゃんが異様なまでに木乃香ちゃんを避けててなかなか成功しない

まあもちろんのごとく俺は嫌われて近づいて来ようともしない、逆に俺から近づくと歯を出して唸ってくる

・・・君は犬かなんか？

若干刹那ちゃんの奇行を楽しみながらも木乃香ちゃんと刹那ちゃんを近づけるために刹那ちゃんを夕風を人？質に脅してみることにした・・・ちようどいいことに明日休みだし

『・・・もしもし』

「あつ桜咲さん？林原だけど」

『っ！・・・なんですか？』

電話の相手が俺とわかりあからさまな警戒を浮かべる刹那ちゃん・
・クックク

「明日朝１１時に駅前の時計台に来てください。来なかつたら夕風をへし折って炉に入れて僕の像を作ります」

『なっ！？えっちよつと！』

唐突に意味不明なことを言われたせいかな若干混乱しているようだ・
・うん無視だな

「じゃっそついうことで・・・ああお洒落してきてね」

『ちよっ「ピッ」ツウーツウー・・・・・・・・・・』

さあて二つ目の仕込みは完了

次は

『はいもしもし〜近衛ですけど〜』

「ああ俺だ林原だ」

『あつ先生？なんや？』

刹那ちゃんとは対照的にこちらは嬉しそうな声を出す・・・麻帆良の良心だな

他のやつはみんなろくでもないorz

「実は修学旅行で何を持っていったいいか分からんから、前にした約束も果たしたいから買い物に付き合ってくれないか？」

『ええよ〜』

うん即答やっぱいい娘だな（泣）

「じゃあ明日駅前に11時に集合な」

『ほな明日』

電話を切り寝転ぶ、まだエヴァちゃんの家には帰っていません・・・
修学旅行前にエヴァちゃんの家にといたら自分が行けないからって八
つ当たりされるに決まっている。

君子危うきに近寄らずだな

そんな事を考えつつ横になり、眠る。起きると約束の時間に近かつ
たので急いで着替えて約束の場所に向かう・・・もちろん夕風は竹
刀袋に入れて持っていく

集合場所にはすでに木乃香ちゃんが来ており、俺に気づくと手を振
って近づいてきた。

「おはよう先生」

「おはよう近衛」

「やあん木乃香でええって言うてるやん」

憤慨したように頬を膨らませる木乃香ちゃん

「はいはい了解お姫様」

そんなしょうもないことを話していると、コソコソと接近してくる
気配を感じた・・・はっはっん木乃香がいたからびびってるな

ニタニタと笑顔を浮かべて近づいてきた人物に対してメールを送る。

『早く出てこないと夕凧をへし折るby林原』

メールの受信音と共にビクツとするのを感じた。

渋々と刹那ちゃんは隠れていた茂みから出てきて木乃香の前に立った。

「ああ〜せつちゃんや〜っ!」

木乃香ちゃんは現れた刹那ちゃんに喜び抱き着く

「こっこの・・・お嬢様!」

刹那ちゃんは抱き着かれたことに驚きアワアワとしている。

「クツクク・・・桜咲も今日は一緒だから」

「そうなん?嬉しいわ〜」

笑いを押し殺して木乃香ちゃんに刹那ちゃんの参加を伝えると木乃香ちゃんほめちゃくちゃ喜んで笑顔を浮かべている。

ふと刹那ちゃんを見ると鋭い目をむけてくる・・・あれ？反応がおかしいな？

「失礼ですが・・・どちらさまですか？」

ああ俺の顔をちゃんと見たことがなかったっただけ・・・

「ああ俺は林原孝明だ」

「はっ？」

刹那ちゃんは俺の言葉に驚き口を開け茫然自失としている・・・女の子が口を開きっぱなしにしないの、はしたない

内心注意していると、意識を取り戻した刹那ちゃんはさらに目を鋭くする。

「本当ですか？」

「炉にくべようか？」

「・・・おはようございます先生」

「おはようございます桜咲さん」

ニコヤカな詐欺師のような笑みを浮かべて挨拶をする。

刹那ちゃんは諦めたような顔をしている・・・うんドレス心がくすぐられるな

「じゃあ買い物に行こうか？」

「はいな」

俺の言葉に木乃香ちゃんは頷いて刹那ちゃんの腕をとり、歩いてデパートへと向かう・・・にひっ

刹那ちゃんは死んだ魚のような目をして木乃香ちゃんの為すがままになっている・・・少しでも逃げようとしたら竹刀袋をプラプラさせて刹那ちゃんの行動を封じる。

ちなみに刹那ちゃんは竹刀袋を見るたびに涙目でプルプルと犬のように身体を震わせている・・・犬耳とか似合うな間違いなく

まあそれでも刹那ちゃんはぎこちないながらも笑みを浮かべている・・・やっぱり君は笑っていなければいけない。いや君達かな？

木乃香ちゃんの笑顔も君といることでさらに綺麗なものに昇華している。

やっぱり女の子の笑顔は最高にして最強だな

野郎の笑顔はいらんけど・・・

それでも笑わせたいと思うのは嫌な習性だ・・・黒いGさんばりだなオイ

ちなみに笑わせるのは野郎は二の次三の次だけどね

にしてもあの二人を見ていると妹達を思い出すよ・・・まあ最後に投げ掛けられた言葉を思い出さなければ最高なんだけど

ああゝ軽く鬱になるな

一人で思っだしダメージを受けていると木乃香ちゃんが話しかけてきた。

「必要なもん買えたん？」

「おうばっちりだ」

実際は木乃香ちゃんと刹那ちゃんを会わせるのが目的だったから買

うものなんてないんだけどな

「楽しめたか？」

「もちろんや」

俺の問い掛けに木乃香ちゃんは迷うことなく即答する・・・楽しんでいただけたら幸いですよ

少し離れた位置でこちらをうかがっている刹那ちゃんを見ながらも思う・・・魔法がなければこの娘たちはもっと笑えるのか？

魔法がなければネギくんだって余裕で笑わせることが出来るだろうな・・・でもどうやって無くそうかね？

珍しく真面目に悩みこみ魔法について思考しながらも木乃香ちゃんと刹那ちゃんと一緒にデパートを回る。

すでにだいたいのところは見終えたらしく今は三人でお茶をしてい

るところだ。

そして木乃香ちゃんがお手洗いにいったうちに刹那ちゃんに話しかける。

「楽しかったか？」

「・・・ええ」

刹那ちゃんは何か辛そうな顔をしながらも俺の問いを肯定する。

「そうか・・・なら剣を捨てよう」

「・・・それは出来ません」

刹那ちゃんは嫌々と駄々っ子のように首をふる・・・まあ期待はしてなかったさ

「・・・今日の笑顔がまた見れるといいよな」

「えっ？」

俺はその言葉と共に刹那ちゃんに夕風を返した・・・今日笑ったご褒美だ

「お金は払っておくから積もる話もあるだろうし今日はゆっくりしていくといい」

伝票をとり支払いをして店から出ていく・・・ああなんて優柔不断なんだ俺ってやつは

アホめ

《続く》

19話：人？質って大事だよね？（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

ずっとシリアスというか主人公のクズっぷりが目立って話が進まな
いぜっ！！

色々考えているのとは違ってきてるぜ！！

うんがんばる

次回もお楽しみに

20話：修学旅行の思い出は正座させられたことかな

何故修学旅行の集合場所はどこの学校も東京駅なのだろうか？

疑問を呈さずにはいられないな・・・面倒だから学園集合にして学園からバス出して駅まで送ってけよ、ジジイ」

『フオフオ経費削減の為じゃよ』

「帰ってきたらお前の毛を削減というか引っこ抜いてやるから覚悟しとけ」

電話越しに聞こえたいらつくバルタン笑いに腹を立て電話の電源ボタンを押して通話を終える。

最初は無事集合出来たこととどこまで手を出していいかをジジイに尋ねていたらいつの間にかやらジジイに対して殺意が芽生えていたというわけだ。

人間ならよくあるよな？

ジジイに対する殺意をコンビ二弁当並に簡単に温めながら先ほどからうちのクラスをナンパしてくるチャラ男どもを居合拳で沈めていく

狙うは股間ただ一つ

えぐりこむように打つべし！！打つべし！！

だいたいこいつらまだ中学生だから行為に至ったら普通に国家権力に掴まるぞ？

確かに中学生の見た目の奴は少ないけどなあゝ

くだらいことを考えつつも手を止めることなく、回転を加えながら擦込んでいく

気づいた奴が何人か視線を向けてきたが、ニコニコと笑顔を浮かべていると小首を傾げて、気のせいかなと言わんばかりに気にせず去っていった。

危ない、危ない。

見つからないように作業を続けていく

馬鹿みたいによってくるなあと感心して積み上げられた屍の山を苛立たしげに見上げる。

俺の玩具・・・ゲフンゲフン・・・生徒に手を出そうなんざ100

年は早いな

某左手に鬼を宿した先生並に熱いことを考えている（実際は全く違うが）と

全員揃ったらしく出発すること、すぐに電車へと乗り中で人数確認をした後すぐにアイマスクと耳栓をして寝る。

その様子を見たちうちゃんが何かを感じ取ったらしく、僕と同じようなスタイルを取り外界との世界を遮断している。

この後俺が関与する場所などないので、カエル騒ぎも薬味坊主が親書を取られようと無視をした。

寝ている間に京都へと到着

清水寺に着くやいやなすぐにエヴァちゃんのご機嫌を取るためのお土産を清水寺へと続く坂のお土産屋で買いあさり、コンビニで郵送する。

帰った頃には機嫌がよくなってますように

多少神頼み感覚で、手を合わせ店員にお土産を預け、その場を後にする。

一仕事終えたようにわざとらしく額を拭った後もはやすることもなくなつてので、一足先に音羽の滝へと向かい日本酒が流れているかを確認

うむ、バッチリ

確認した上でもはや杓を使わずにがぶ飲みを開始する。
やつすい酒だなあ

大錦 とか森 蔵とか流せよと内心文句を述べつつも飲みまくり、酔いが回ってきたせいか水が混じって薄い酒に苛立ちを感じ屋根に登り樽ごと飲み始める。

くう

どうやら俺自身も修学旅行でテンションが上がってたらしく、酒樽

一つを全て飲み終えてしまい脇役教師A・通称瀬流彦先生に回収され、その後新田先生にお叱りを受けた。

教師の心得を云々カンヌンもはやミミタコなので右から左へと聞き流しながらも生前に行った修学旅行を思い出す。

．．．．．確か最終日かなんかに騒ぎ過ぎて同じ部屋の奴ら10人ぐらいと一緒に旅館のロビーに三時間近く正座させられて、P Pを床にたたき付けられ大破されて

説教が終わった後、正座で痺れた生まれたての小鹿みたいにガクガク震えた足で、何故か男子全員で女湯を覗きに行くことになり、正座していなかった男子たちに肩を支えられながら女湯へと向かい．．．

ああ．．．トラウマが

悪夢を消し去るように頭を振り、説教も終わったので正座で痺れた足で生まれたての小鹿のように立ち上がる。

音羽の滝で酒を全て飲んでしまったせいか、原作と違い3・Aの連中は異常に無常に騒がしいので……無視をした。否、嘘である。

このままでは副担任の俺にまでお叱りが来るのは目に見えていたので、エヴァちゃんからパクったもとい拝借してきた気体状の睡眠薬を3・Aの部屋にばらまいてきた。

すまん、お前らの楽しみを奪うのは正直心苦しいが……
・・自分の保身を優先させてもらおう。

もう小鹿にはなりたくないし

まあ明日は関わらないようにするから安心してくれ

内心生徒のためではなく厄介事に関わりたくないという完全な“逃げ”からの思いだと気づいていたが別に気にしない。

俺が楽しめればいいのだ。

そしてあいつらが楽しんでくれれば尚いい。

騒ぎの中心である3・Aが寝静まり、別にもないので旅館の屋根の上で横になる。

しばらく寝ていると風呂場から騒音が聞こえたので刹那ちゃんが薬味少年の相棒をニギニギしていると予想し、無視を決め込んだ。中学生の身体に興味はないのだ

友達だった渡邊君のように「身体はロリ魂で出来ている」とか言ったりはしない・・・決して

くだらないことを考えながらも再び聞こえた騒がしい音に反応し、身体を起こす。

二度目の襲撃と推測して、すぐに気配を消しながら京都駅へと向かう。

ここでフェイトと争ってもいいが、全力でやったら間違いなく地形が変わるのは目に見えてるし、奴も俺の正体には気づいてないからからまれることはないだろう。

京都駅に向かいながらもいつものように不審者モードへと移行していく

今回は福 ボイスで行くことにした。

さてさていっちょハッピーエンドにしちやいますか？

仮面の下に笑顔を浮かべ走りつづける。

世界を笑うように

《続く》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8589/>

魔法先生ネギま！～顔なき英雄～

2011年1月20日02時06分発行